

高川古墳群

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XV)

1991.3

兵庫県教育委員会

『高川古墳群』正誤表

頁	行	誤	正
16	14	溶液16	溶液
35	4	F26とF27	F25とF26
	5	F26	F25
		F27	F26
	13	F28・F29	F27・F28
	15	F28・F29	F27・F28
	16	F26・F27	F25・F26
		F28	F27
		F29	F28
	18	F26・F27とF28・F29	F25・F26とF27・F28
		F26・F27	F25・F26
	19	F28・F29	F27・F28

〔抹消〕

78頁の挿図66 兵庫県下出土の裝飾大刀の「4●」

79頁の表4 兵庫県下裝飾大刀出土古墳地名表の

「4舟塚古墳 多紀郡丹南町味間北 卑風塚大刀」



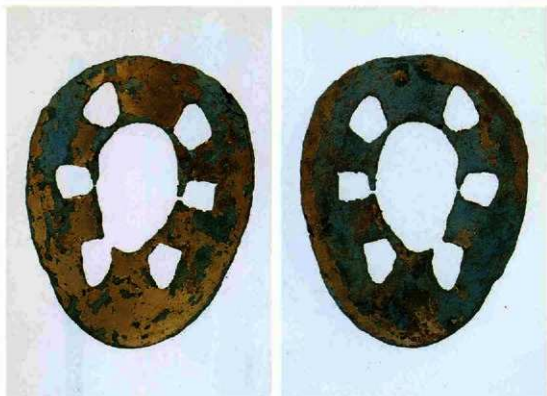
1. 高川古墳群全景写真



2. 1号墳全景写真



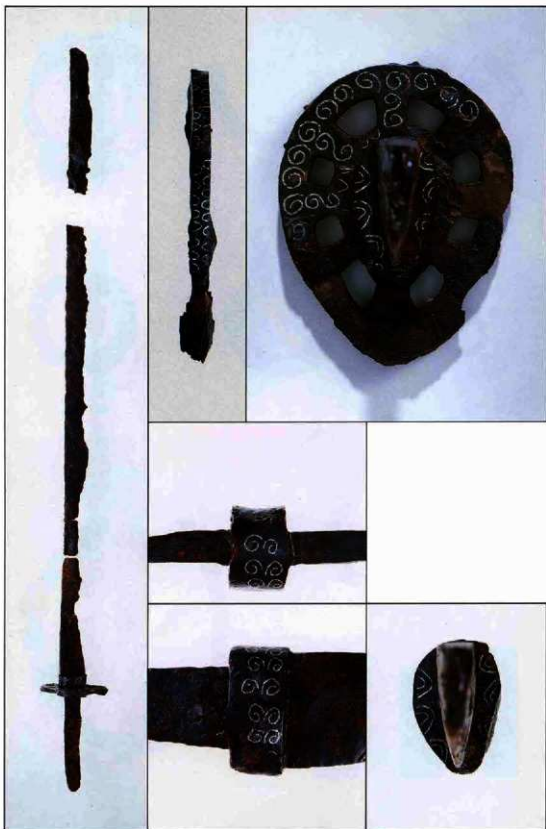
3. 2号墳全景写真



1. 1号填金铜製鈔



2. 2号填铁地金銅張飾金具



2号墳銀象嵌大刀



1. 1·2号填耳塞



2. 1·2号填玉頰



1. 1号墳土器



2. 2号墳土器

例 言

1. 本書は兵庫県三田市藍本字高川・正保山に所在する高川古墳群の1・2号墳の発掘調査報告書である。日本道路公団近畿自動車道舞鶴線建設に伴い、昭和61年冬に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。なお、第1次調査は社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係 大平茂、村上賢治、第2次調査は同 岡崎正雄、市橋重喜、中川 渉、藤村淳子が担当した。
2. 調査結果として古墳時代後期の横穴式石室2基がある。なお、3号墳は路線外に保存されている。
3. 調査地区は、道路建設用 STA.106を中心とした地点で面積約1,290㎡にわたった。
4. 発掘作業は株式会社 染の川組に委託し、また、気球写真については、ワールド航測株式会社に委託し、作業の迅速かつ円滑化をはかった。
5. 遺物の実測、淨図は整理作業班で行い、遺物写真については森 昭氏、吉田カメラ商会及びサンスタジオの横山英俊氏に依頼した。なお、金属製品の保存処理については、奈良国立文化財研究所保存科学研究室の協力を得て加古千恵子が兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
6. 遺物は土器は番号のみ、石製品をS、金属製品をF、玉類をJと分類し、数字にて個体識別を行っている。
7. 本書の執筆者及び執筆分担は以下の通りである。

岡崎 正雄	第1章、第3章第2・3・8節、第4章第5・6節
大平 茂	第1章、第3章第1節
中川 渉	第2章第2節、第3章第6節、第4章第2・4節
藤村 淳子	第2章第1節、第3章第5・7節、第4章第1・3節
加古千恵子	第3章第4節
大下 明	第3章第5・7節(石器)
8. 付載として、耳環について、奈良国立文化財研究所 村上 隆氏の玉稿を頂き、掲載させて頂いた。
9. なお、本書の編集は岡崎が行い、その責任がある。
10. 最後に本書をまとめるにあたって、奈良国立文化財研究所、京都市埋蔵文化財研究所、三田市教育委員会ほか各機関や研究者の方々のご指導・助言および協力を頂きました。記して感謝いたします。



挿図1 高川古墳群位置図

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う調査	1
第2節 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺跡の調査	8
第1節 第1次調査	8
第2節 第2次調査	11
第3節 整理作業	15
第4節 出土金属製品の保存処理作業	16
第5節 1号墳の調査	20
第6節 2号墳の調査	42
第7節 その他の遺構の調査	65
第8節 小結	71
第4章 ま と め	72
第1節 古墳時代の須恵器	72
第2節 古代～中世の須恵器	73
第3節 玉類	74
第4節 裝飾大刀	76
第5節 中・近世墓	81
第6節 高川古墳群について	82
付 載 高川古墳群出土の耳環の構造と材質について	83

図版目次

- 巻首図版1 遺構 1. 高川古墳群全景写真
2. 1号墳全景写真
3. 2号墳全景写真
- 巻首図版2 遺物 1. 1号墳金銅製鐙
2. 2号墳鉄地金銅張飾金具
- 巻首図版3 遺物 2号墳銀象嵌大刀
- 巻首図版4 遺物 1. 1・2号墳耳環
2. 1・2号墳玉類
- 巻首図版5 遺物 1. 1号墳土器
2. 2号墳土器
-
- 図版1 遺跡写真(1) 1. 虚空蔵山を望む(東から)
2. 作業風景
- 図版2 遺跡写真(2) 1. 調査前全景(西から)
2. 調査後全景(西から)
- 図版3 1号墳遺構(1) 1. 調査前(南から)
2. 石室全景(西から)
- 図版4 1号墳遺構(2) 1. 近世丹波焼罎鉢出土状況
2. 古代・中世須恵器出土状況
- 図版5 1号墳遺構(3) 1. 炭層検出状況(南から)
2. 石室第2次床面(南から)
- 図版6 1号墳遺構(4) 1. 奥壁付近副葬品出土状況(北から)
2. 鉄線出土状況
- 図版7 1号墳遺構(5) 1. 石室全景(真上から)
2. 石室全景(南から)
3. 奥壁付近副葬品出土状況(南から)
- 図版8 1号墳遺構(6) 1. 石室(正面から)
2. 石室掘り方完掘状況(南から)
- 図版9 2号墳遺構(1) 1. 調査前(南から)
2. 表土除去状況(南から)

- 図版10 2号墳遺構(2) 1. 炭層・中世遺物出土状況(西から)
2. 古墳時代・古代遺物出土状況(南から)
- 図版11 2号墳遺構(3) 1. 石室第2次床面(南から)
2. 石室側面(東から)
- 図版12 2号墳遺構(4) 1. 奈良時代須恵器長頸壺出土状況
2. 奈良時代須恵器長頸壺(蔵骨器)出土状況
- 図版13 2号墳遺構(5) 1. 石室全景(真上から)
2. 石室全景(南から)
3. 奥壁付近副葬品出土状況(南から)
- 図版14 2号墳遺構(6) 1. 副葬品出土状況(西から)
2. 鉄地金銅装飾金具出土状況(西から)
- 図版15 2号墳遺構(7) 1. 石室(正面から)
2. 石室掘り方完掘状況(南から)
- 図版16 その他の遺構(1) 1. 集石遺構(東から)
2. 同石材除去後(東から)
3. 中世墓1(南から)
- 図版17 その他の遺構(2) 1. 中世墓2 上面遺物出土状況(東から)
2. 中世墓2 土師器小皿出土状況(東から)
- 図版18 その他の遺構(3) 1. 中世墓3(北から)
2. 中世墓4(東から)
- 図版19 1号墳遺物(1) 須恵器 杯蓋・杯身ほか
- 図版20 1号墳遺物(2) 須恵器 有蓋高杯
- 図版21 1号墳遺物(3) 須恵器 高杯・壺
- 図版22 1号墳遺物(4) 須恵器 高杯・提瓶
- 図版23 1号墳遺物(5) 須恵器 杯・椀・小皿、土師器 杯・小皿、丹波焼 播鉢
- 図版24 1号墳遺物(6) 1. 須恵器 壺、丹波焼 鉢
2. 須恵器 椀、黒色土器 椀、銭、磁石
- 図版25 1号墳遺物(7) 1. 耳環
2. 金銅製鐙
- 図版26 1号墳遺物(8) 鉄鏃
- 図版27 1号墳遺物(9) 1. 刀、刀子
2. 鎌
- 図版28 2号墳遺物(1) 須恵器 蓋・四耳壺・甗

図版29	2号墳遺物(2)	須恵器 杯蓋・杯身・長頸壺
図版30	2号墳遺物(3)	須恵器 椀ほか
図版31	2号墳遺物(4)	銀象嵌大刀
図版32	2号墳遺物(5)	刀装具
図版33	2号墳遺物(6)	1. 刀子・鉄鏃 2. 轡
図版34	2号墳遺物(7)	1. 鉄地金銅装飾金具 2. 鞍金具ほか
図版35	2号墳遺物(8)	釘・紡錘車
図版36	その他の遺物(1)	瀬戸・美濃焼 灰釉皿、土師器 皿、丹波焼 壺・匣鉢
図版37	その他の遺物(2)	1. 須恵器 椀、丹波焼 播鉢・甕 2. 石器 鉄
図版38	X線写真	1. 銀象嵌刀装具 処理前(横から) 2. 銀象嵌刀装具 処理前(斜めから) 3. 銀象嵌拡大写真

挿図目次

挿図1	高川古墳群位置図	
挿図2	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査	2
挿図3	古墳の位置	3
挿図4	周辺遺跡地図	6
挿図5	調査前地形測量及び確認トレンチ配置図	9
挿図6	確認トレンチ断面図	10
挿図7	調査後地形測量図	12
挿図8	2号墳墳丘調査	13
挿図9	1号墳石室調査	14
挿図10	現地説明会	14
挿図11	実体顕微鏡による象嵌表出作業	16
挿図12	銅製品の減圧樹脂含浸	17
挿図13	鉄製品の真空樹脂含浸	17
挿図14	樹脂含浸引上げ作業	17
挿図15	錆取り作業	17

挿図16	鎧・象嵌の表出工程（処理前→途中→処理後）	18
挿図17	鍔・象嵌の表出工程（処理前→途中→処理後）	18
挿図18	保存処理された鉄製品（処理前・処理後）	19
挿図19	1号墳地形測量図	21
挿図20	1号墳墳丘断面図	22
挿図21	1号墳石室実測図	23
挿図22	1号墳石室内遺物出土状況模式図	24
挿図23	1号墳石室内副葬品（土器）出土状況図	26
挿図24	1号墳石室内副葬品（鉄器ほか）出土状況図	27
挿図25	1号墳須恵器(1)	28
挿図26	1号墳須恵器(2)	29
挿図27	須恵器ヘラ記号	30
挿図28	1号墳須恵器(3)	31
挿図29	1号墳鉄器(1)	32
挿図30	1号墳鉄器(2)	33
挿図31	1号墳鉄器(3)	34
挿図32	1号墳金銅製鍔	34
挿図33	1号墳耳環	35
挿図34	1号墳ガラス玉	36
挿図35	1号墳石室再利用遺物出土状況	38
挿図36	1号墳再利用土器	39
挿図37	1号墳石器・鉄器	40
挿図38	2号墳地形測量図	43
挿図39	2号墳墳丘断面図	44
挿図40	2号墳石室実測図	45
挿図41	2号墳石室内遺物出土状況模式図	46
挿図42	2号墳石室内副葬品出土状況図	47
挿図43	2号墳須恵器	48
挿図44	2号墳鉄器(1)	50
挿図45	2号墳鉄器(2)	51
挿図46	2号墳鉄器(3)	52
挿図47	2号墳鉄器(4)	54
挿図48	2号墳鉄器(5)	55

挿図49	2号墳鉄器(6).....	56
挿図50	2号墳鉄器(7).....	58
挿図51	2号墳耳環・玉類.....	59
挿図52	2号墳石室再利用遺物出土状況図.....	61
挿図53	2号墳石室再利用 土器(1).....	62
挿図54	2号墳石室再利用 土器(2).....	63
挿図55	2号墳石室再利用 鉄器.....	64
挿図56	中世墓1 鉄器.....	65
挿図57	中世墓2 実測図.....	65
挿図58	中世墓3 実測図.....	66
挿図59	中世墓4 実測図.....	67
挿図60	集石遺構実測図.....	68
挿図61	土器.....	69
挿図62	石器.....	70
挿図63	1号墳ガラス玉法量.....	74
挿図64	2号墳ガラス玉法量.....	74
挿図65	丹有地区の象嵌刀装具(復原図).....	77
挿図66	兵庫県下出土の装飾大刀.....	78

表 目 次

表1	周辺遺跡地名表.....	7
表2	確認調査トレンチ概要.....	8
表3	玉類計測表.....	75
表4	兵庫県下装飾大刀出土古墳地名表.....	79

第1章 調査の経緯

第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う調査

近畿自動車道舞鶴線（以下「近舞線」と略称する）は、丹波・丹後地方と京阪神地域を結ぶ幹線道路として計画された総延長76.5kmの高速自動車道である。このうち福知山市～三田市間（53.8km）は昭和48年10月に施工命令がだされ、日本道路公団において建設に必要な事前調査と設計事務が始まった。その後、昭和52年9月に福知山市～丹南町（41.2km）と、同54年3月に吉川町～三田市（12.6km）の路線発表があった。

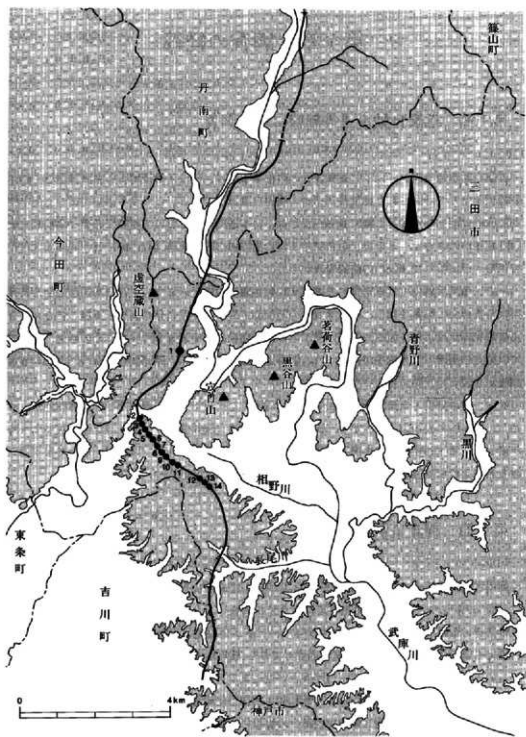
一方、事業区域内（兵庫県側）の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、路線発表後の昭和53・54・55年度に分布調査を実施してきた。さらに昭和59年度には、溜池改修等付帯工事に伴う地域の分布調査も行った。その結果、最終的に64地点の遺跡・散布地等が確認され、随時遺跡保存協議の末、確認調査を含め53遺跡の事前調査が必要という結論に至ったのである。

なお、遺跡確認・全面調査は昭和56年度に丹南インター予定地の西吹及び杉の散布地から開始し、基本的に福知山工区から三田工区へと進め（56年度－3ヶ所・57年度－14ヶ所・58年度－15ヶ所・59年度－18ヶ所・60年度－20ヶ所・61年度－9ヶ所（以上同一遺跡で多年度に渡るものを含む））同61年度の丹南町に所在する初田館跡の調査をもって完了した。

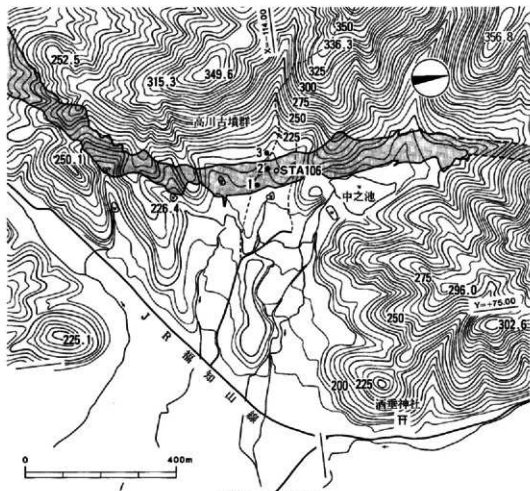
第2節 調査に至る経過

高川古墳群は三田市藍本字高川・正保山に所在し、虚空蔵山麓の標高約220mに位置する。古墳は、昭和59年度の近舞線溜池関連事業に伴う分布調査により本線内（STA106付近）に確認された新発見の遺跡である。現在3基の古墳があり、内2基が道路建設用地にかかっていた。なお、2基の古墳とも既に封土は除去され、石室も崩壊しており、確実に古墳かどうか判断する必要があった。

この古墳の取扱いについては、道路盛土が近辺まで押し寄せ、公園側の工事工程の絡みからも保存は難しい状況にある。しかも、昭和60年度の当初確認調査予定には入っておらず、事態は急を要した。そこで公団と県教育委員会の協議により、三田市内の確認調査を一時止め追加変更契約することで話がまとまり、12月に急遽対応することとなった。



挿図2 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の調査



挿図3 古墳の位置

昭和60年12月9日から13日まで確認調査を行い、その結果により翌61年1月末から全面調査を実施した。

近畿自動車道舞鶴線関係の三田工事区内の主な埋蔵文化財発掘調査は、1. 高川古墳群（藍本）2. 古城山1号窯跡（西相野）3. 古城1号窯跡（西相野）4. 古城5号窯跡（西相野）5. 向上古城1号窯跡（西相野）6. 向上古城2号窯跡（西相野）7. 中池ノ内1号窯跡（上相野）8. 西谷池1号窯跡（上相野）9. 西谷池2号窯跡（上相野）10. 萩ノ尾1号窯跡（上相野）11. 寄合谷窯跡（上相野）12. 木戸窯跡（下相野）13. 下相野釜屋窯跡（下相野）14. 中尾城跡（下相野）の14か所で、古墳2基・平安時代須恵器窯跡11基・中世山城1城・近世丹波焼窯跡1基である。なお、高川古墳群は3基の円墳から構成されており、その内1・2号墳の2基の調査を実施した。

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

高川古墳群は、三田市藍本字高川・正保山に所在する。この位置は、摂津と丹波の境をなす日出坂峠の南、武庫川の右岸にあたる。西相野と藍本庄との境は相野川と武庫川の谷中分水界にあたり、日出坂付近から南流する武庫川は、曲りという地名の示すようにへアピンカーブを描いて大きく屈曲し、北東方向に流れの向きを変えている。相野川を境として、南の山地は鮮新-最新世の大阪層群下部の砂・礫・粘土・凝灰岩からなり、北の山地は白亜紀後期-古第三紀火成岩体の矢田川・生野・有馬層群の流紋岩・緑色凝灰岩類からなっている。

高川古墳群は虚空蔵山東麓の標高約210~220mの山地にある。水田部の標高は約170~180mで、その比高差は約40mである。古墳群は峠をこえて丹波焼の里下立杭に至る道沿いに並ぶ。この道は古墳群の手前で分岐し、山岳寺院である虚空蔵寺への参道となっている。

第2節 歴史的環境

三田市域の古墳時代後期の遺跡には、集落跡・窯跡・墓地がある。集落跡・窯跡はこれまでに調査が進んでいる北摂三田ニュータウンや青野ダムの周辺のもの知られている。北摂三田ニュータウンの平方遺跡や平方西遺跡、また青野ダム遺跡群の郡塚1号窯・平井遺跡・溝ノ尾遺跡¹⁾では、窯跡と須恵器生産に関わる集団の集落が見つかっており、周辺の丘陵上では古墳群が築かれている。これらの地域ではその後も須恵器生産が続けられ、やがて三田市北西部の相野古窯跡群に移った後、「六古窯」の一つである「丹波焼」へと引き継がれてゆく。

こうした須恵器生産の一方、造墓活動もさかんで、各集落背後の尾根ごとに古墳群の形成が認められる。古墳群の内容は武庫川の左岸と右岸とで様相が大きく異なっている。左岸の丘陵上は、最も規模の大きい加茂古墳群をはじめ、福島古墳群、大原古墳群など多数の古墳群で埋め尽くされたような状況を呈している。これは左岸の方が可耕地が大きく、街道筋にもあたるため、盆地東縁の山裾に集落が密集していることによると思われる。この辺りは弥生時代頃から集落の立地が変わっておらず、現集落の下にも遺跡が眠っているのであろう。また川除・藤の木遺跡においても壑穴住居跡が調査されており、低地の集落も徐々に明らかになりつつある。

古墳は6世紀初頭～中頃には川除古墳群で木棺直葬墳が造られている⁽²⁾ものの、6世紀後半から7世紀初頭にかけての群集墳を形成する時期には、ほとんど横穴式石室ばかりが造営されている点に特徴がある。中でも加茂古墳群中の竹内古墳は石棚付きの横穴式石室をもっており、特異な存在である。青竜寺裏山1・2号墳は終末期古墳としてつとに著名である。1号墳は石室から須恵質埴輪が出土しており、2号墳は凝灰岩質砂岩の切石を用いた石室を有している。また3号墳からも須恵質埴輪が出土しているようで、同様の埋葬施設をもつ可能性が高い⁽³⁾。

一方、武庫川右岸の後期古墳は西野上・貴志付近の丘陵上に集中し、各丘陵ごとに数基から20基程度の古墳群が営まれている。横穴式石室をもつ古墳は中西山3号墳⁽⁴⁾以外知られておらず、木棺直葬墳が大多数を占める状況は左岸の古墳群と好対照である。西山6号墳は前方後円墳で、木棺直葬の主体部(埋葬施設6)から金銅製冠が出土している⁽⁵⁾。西山古墳群・平方古墳群中には、木棺直葬以外に横穴式木室を主体部とする古墳が計5基見つかっており、いわゆるカマド塚が盛行する地域との関連が注目される。西山7号墳の横穴式土壇⁽⁶⁾もこの系譜を受けたものであろう。さらに奈良山12号墳と奈かり与古墳の凝灰岩質砂岩を用いた横口式石棚⁽⁷⁾は、対岸の青竜寺裏山古墳群とともに、三田盆地の群集墳の終焉を告げるものである。

盆地内の古墳群が10数基～数10基単位で群集するのに対し、武庫川・相野川沿いの谷あいには展開する三田市西北部では大規模な古墳群は形成されず、単独かせいぜい10基未満に止まるものがほとんどである。この地域の古墳の発掘例は少ないものの、最近調査された東家地古墳が右片袖式の石室をもつように、横穴式石室を主体部とするものが多いようである。東家地古墳では裝飾付器台やミニチュアの須恵器、轡・鉸具といった馬具などが出土した⁽⁸⁾。

大方の古墳が相野川より東側の相野・東本庄・井ノ草・東山辺りに立地しており、武庫川右岸で現在判っているのは高川古墳群だけである。しかし武庫川と相野川の谷中分水界にあたるこの地は、比較的可耕地に恵まれ、古くから集落が営まれていたようである。高川古墳群を西に望む藍本庄遺跡は弥生時代中期～中世にかけての遺跡で、多量のサヌカイトの剥片や、室町時代の掘立柱建物跡などが検出され⁽⁹⁾、地名や文献資料から「興福寺領藍莊」との関係が予想される⁽¹⁰⁾。高川古墳群の母体となった集落もこの辺りに存在したことは間違いないだろう。

註 (1) 兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」1987年

兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)」1988年

(2) 高島信之「川除古墳群第8号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和60年度 1988年

(3) 三田市教育委員会 山崎敏明氏より御教示いただいた。

(4) 井守徳男「中西山遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和56年度 1983年

(5)・(6) 三田市教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ」1983年

(7) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」1983年

(8)・(9) 三田市教育委員会 山崎敏明氏より御教示いただいた。

(10) 轟中剛「藍本敷布地」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度 1987年



挿図4 周辺遺跡地図

No	遺跡名称	基 数	所 在 地	備 考
1	高川古墳群	3基	藍本字高川・正保山	円墳、横穴式石室
2	下ノ戸古墳		藍本字下ノ戸	円墳、木棺直葬
3	堂ノ森古墳		藍本字堂ノ森	全長6m
4	月ヶ谷古墳群	2基	四ッ辻字月ヶ谷	円墳
5	権現浦東古墳		四ッ辻字権現浦	円墳
6	高が尾古墳群	2基	上相野字高が尾	円墳、木棺直葬
7	鯉嶋古墳群	2基	上相野字鯉嶋	円墳、横穴式石室
8	権現浦古墳群	3基	四ッ辻字権現浦	円墳、横穴式石室
9	大池ノ尻古墳		東本庄字大池ノ尻	円墳、横穴式石室
10	大蔵谷古墳群	2基	東本庄字大蔵谷	円墳、横穴式石室
11	黒谷古墳群	3基	東本庄字黒谷	円墳、横穴式石室
12	城山古墳		東本庄字城山	円墳、横穴式石室
13	大谷古墳群	2基	須磨田字カナクソ	円墳、横穴式石室
14	茗荷谷古墳群	3基	東本庄字茗荷谷	円墳、横穴式石室
15	東家地古墳		東本庄字東家地	横穴式石室、馬具
16	沢山古墳群	2基	東本庄字沢山	円墳、横穴式石室
17	振木古墳		井ノ草字振木	円墳、横穴式石室
18	宮ノ谷古墳		井ノ草字宮ノ谷	円墳
19	田中田古墳		東本庄字田中田	円墳
20	沢古墳群	2基	井ノ草字沢	円墳
21	井谷古墳		東山字井谷	
22	大戸ノ松古墳群	3基	東山字大戸ノ松	円墳、横穴式石室
23	角蓮寺古墳群	8基	東山字角蓮寺	円墳、横穴式石室
24	畑ノ谷古墳		東山字畑ノ谷	円墳
25	赤子谷古墳群	6基	東山字赤子谷	前方後円墳、横穴式
26	新坂古墳群	2基	東山字新坂	円墳、横穴式石室
27	博地谷古墳		中野開拓字博地谷	横穴式石室、陶棺
28	宮脇古墳群	18基	末野字道東、宮脇字山添他	円墳、横穴式石室他
29	小人松古墳		宮脇字小人松	大甕出土?
30	内神古墳群	4基	下内神字野田谷他	円墳、木棺直葬
No	遺跡名称	種 別	所 在 地	備 考
A	虚空蔵寺	社寺跡	藍本字国ヶ向	
B	酒壺神社	社寺跡	藍本字庵ノ上	
C	藍岡山城	城館跡	藍本字城ノ越	郭、土塁、堀切
D	藍本庄遺跡	集落跡	藍本庄字前中	掘立柱建物、溝他
E	曲り城跡	城館跡	藍本字前ノ塚	郭、堀切
F	中尾城	城館跡	下相野字中尾	郭、土塁、堀切
G	溝口城	城館跡	下相野字倉ヶ坂	郭、土塁、櫓列、溝
H	溝口遺跡	集落跡	下相野字殿垣	旧石器、炭溜土塊
I	下井沢遺跡	集落跡	下井沢字半田郷	縄文土器、石刀

表1 周辺遺跡地名表

第3章 遺跡の調査

第1節 第1次調査

1. 調査の方法とその経過

調査の目的は、近舞線道路建設事業用地内 (STA106付近) の古墳とその他遺構の有無及び性格、さらにその範囲と年代を確認することにある。

調査は、先ず現地草木の伐採から始めた。そして調査区は、1・2号古墳とも古墳主体部の方向に合わせ各4ヶ所のトレンチ (T) を設定する。トレンチの規模は表2の通りである。また古墳の間の平坦地には、若干の微高地と集石、近世陶器の散布が認められた為、ここにも3ヶ所のトレンチを設定した。

2. 発見した遺構と遺物

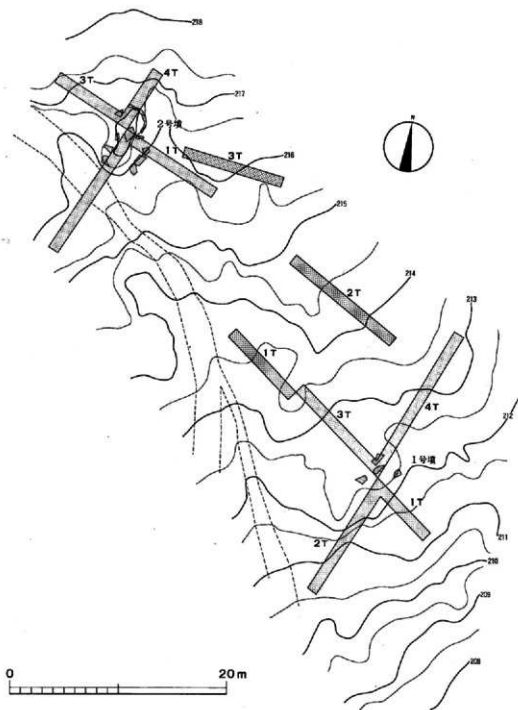
1号墳のトレンチでは、3 Tと4 Tに周溝状の地山整形遺構を検出した。おそらくこれが墳丘端であろう。1 Tと2 Tでは、破壊が著しく墳丘端は確認出来なかった。出土遺物では、2 Tの金銅製の鐙が注目される。

2号墳のトレンチは、土取りのためか地山面までの破壊が大きく、墳丘の規模を判断する遺構は検出出来なかった。出土遺物には、1 Tの鉄地金銅張飾金具をはじめ、中世の土器や古墳時代の須恵器がある。

墳丘外トレンチでは、3 Tに集石の遺構を発見している。

トレンチ名	規模(m)	出土遺物	備考
1号墳1 T	1×7		
1号墳2 T	1×12	金銅製鐙・須恵器	
1号墳3 T	1×11		周溝か?
1号墳4 T	1×15		周溝か?
2号墳1 T	1×10	鉄地金銅張飾金具	
2号墳2 T	1×13	須恵器・中世土器	
2号墳3 T	1×8		
2号墳4 T	1×6		
墳丘外1 T	1×8		
墳丘外2 T	1×12	近世陶器	中・近世墓
墳丘外3 T	1×9.5	近世陶器	集石あり

表2 確認調査トレンチ概要

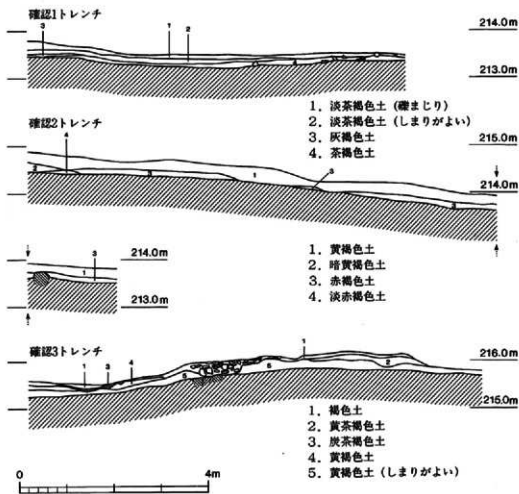


挿図5 調査前地形測量及び確認トレンチ配置図

3. 調査の結果

1・2号墳とも、封土を除去され石室も破壊され、かなり古墳の外観が損なわれているが、石室基底部の石の残存と須恵器等遺物の出土から確実に横穴式石室を内部主体とする古墳であることが明らかとなった。古墳の規模は、破壊が大きいため正確ではないが10m前後の楕円形墳であろう。

また、中世の土器の発見からこの時期に古墳を再利用していることも確認出来たのである。さらに、古墳の間の平坦地では、近世の墓地かと考えられる集石遺構も検出し、広範囲の全面調査が必要と判断する。



挿図6 確認トレンチ断面図

第2節 第2次調査

昭和61年1月、近舞線丹南工事区の多紀郡西紀町所在内場山城跡発掘調査終了後、調査担当の岡崎・中川・藤村の3人は、三田工事区内の緊急を要する調査地点についての立会い及び調査の準備を行っていたが、最終的に1月22日に道路 STA106地点(高川古墳群)・STA58地点(木戸竈跡)の発掘調査を3月末までに終了する事となり、高川古墳群の調査から始め、一部木戸竈跡の調査も併行することとなった。調査の後半に市橋を加え、4人で調査を行う事になる。

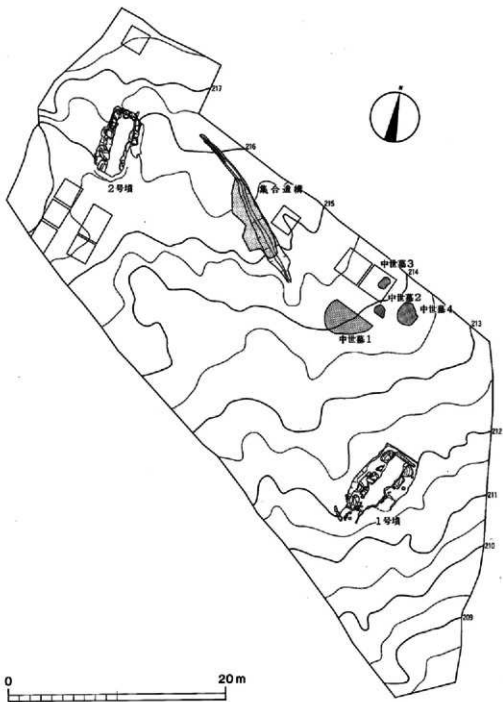
発掘調査を委託する株式会社染の川組と準備を進め、昭和60年12月に実施した第1次調査のトレンチの土層断面の再検討・実測から調査を開始する事になり、調査体制の充実をはかりながら1月29日から本格的な調査を実施した。第1次調査の時点でも、墳丘が殆ど見られず、石室の石も破壊・露出していたため、古墳として復原が難しい状況にあった。

第1次調査トレンチを補充しながら、トレンチを拡充し墳丘を復原しながら、崩れた石室の石を除去する事から石室調査を始めた。1号墳では第1次調査トレンチの排土からではあるが金銅製鐙が出土し、2号墳でも第1次調査の石室内トレンチから鉄地金銅張飾金具が出土していることから石室の保存状況は悪いが遺物は期待された。石室が片袖横穴式と推定出来るに到り石室の追葬・再利用が古墳時代から江戸時代にかけて、ひいては現代までの破壊状況をも追認出来るうと考えられた。

調査は1号墳・2号墳において、墳丘及び石室の調査を進めるとともに、1・2号墳間のトレンチで集石遺構が発見されているため、調査対象面積を1,290㎡と設定し、道路線外の3号墳も含めた墓道の復原をも意図した(挿図7)。調査時に先土器時代(旧石器時代)の三田市溝口遺跡出土土器に似た鉄石英剥片1点が2号墳墳丘から出土したため、縄文時代以前の遺構の発見を考慮して、2号墳の南北に試掘グリッドを設けた。さらに、集石遺構の東南近くから人骨、古銭、瀬戸・美濃焼灰釉皿・丹波焼壺を発見したため、中世墓・近世墓の調査も併せて行った。

また、調査は道路工事の進展の中で進められ、第2次調査開始の時点では周辺の地形は変わっており、調査面積も限定されていた。調査の終了時点の資料から見ると特に中世墓・近世墓の存在から集落との復原資料が十分に記録しえない状況にあった。

調査を厳寒期に実施したため、大雪に見舞われるなど困難な状況の中で、気球による写真撮影などを利用して迅速化を計った。



挿図7 調査後地形測量図

発掘調査の組織

- 事業主体 兵庫県教育委員会
調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査体制 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係
調査員 主任 岡崎正雄・技術職員 市橋重喜・中川 渉・藤村淳子
調査補助員 奥野和宏、水嶋正稔（関西大学）、福勢千鶴子（京都大学）、畑 智智（早稲田大学）、村上穰二（関西外国語大学）
整理作業員 橋本智子
発掘作業委託 株式会社 染の川組
空中写真撮影委託 国際航業株式会社

発掘日誌抄

1月29日～1月31日（晴れ）1次調査のトレンチ土層断面の検討から作業を開始する。

2月3日（晴れ時々雪）本日から本格的調査を実施する。ベルトコンベアーを設置し、表土掘削を開始する。ユンボを使用して石室の崩れた石を取り除く。2月4日（晴れ）1・2号墳とも石室は、炭層中世面まで調査を進める。1号墳第1次調査トレンチ排土から金剛製鋸を発見する。

2月5日（晴れ）1号墳は中世須恵器他遺物のドットマップを行い、2号墳は表土掘削を続け白磁碗を発見する。

2月6日（晴れ後雪）1号墳は近世丹波焼溜鉢と中世須恵器碗を検出し、2号墳はベルトコンベアーの設置替えをし、表土掘削を続ける。

2月7日（晴れ後雪）1号墳は石室の土層観察畦を残して遺物ドットマップを行い、2号墳は築道部より写真撮影を行う。

2月12日（晴れ時々曇り）1号墳灰層から砥石・鉄鎌を発見、2号墳は石室内畦を設け、炭層掘る。奥壁から大刀が出土する。

2月13日（晴れ後曇り）1号墳石室の灰層を掘り下げ、2号墳で灰層の規模を写真撮影後、下面の土器を検出する。2月14日（雨）表土掘削、午後作業を中止する。

2月17日（晴れ）1号墳は石室を清掃し、下面より古墳時代埴瓶・杯他出土。2号墳は石室内畦を除去し蔵骨器と骨片を発見する。2月18日（雪後雨）作業を中止する。

2月19日（晴れ時々曇り）1号墳は遺物ドットマップにて取上げ、金環出土する。2号墳にテントを覆い実測を行う。

2月20日（曇り後雨）1号墳の玉類出土状況を写真撮影し、2号墳は遺物実測を行い奥壁近



挿図8 2号墳墳丘調査

くの下面を掘り刀・轆を発見する。

2月21日(晴れ一時雪) 1号墳は石室内畦を除去する。2号墳は遺物実測を続け、下面の遺物を調査する。

2月24日(晴れ後雪) 1号墳は遺物出土状況の写真撮影を行う。集石遺構の検出を行う。

2月25日(雪) 2号墳の石室内実測を進めるため覆屋を作り、奥壁部から実測を開始する。

2月26日(晴れ) 1号墳は石室の掘り方を出し、石室内2区から鉄鍬が纏まって出土する。2号墳の床面から鉄地金銅張飾金具出土。

2月27日(晴れ) 1号墳は遺物を取り上げる。

1・2号墳の石室掘り方の断面実測を行う。2号墳から鉄石英刺片を発見し、縄文時代以前の遺構を想定した調査を検討する。

2月28日(大雪) 気球写真撮影中止。

3月1日(雪) 積雪20cm。2号墳の床面から玉発見。

3月3日(曇り後小雨) 写真撮影の再清掃。

3月4日(晴れ) 雪残るが気球写真は成功。

3月5日(風強く小雨) 地元と工事関係者に現地説明を行う。2号墳を実測割り付け後、1・2号墳の遺物を取り上げる。中世墓1及び集石遺構の実測。

3月6日(晴れ) 1号墳を割り付け後、実測。2号墳は石を除去し下面を精査する。

3月7日(晴れ) 2号墳は写真撮影し、遺物実測後取り上げる。1号墳は閉塞石を除く。縄文時代以前の遺構を探してグリッドをくむ。3月8日(晴れ) 1・2号墳の石室実測。

3月10日(晴れ) 中川研修のため、市橋調査に参加する。実測を続行する。

3月11日(雨) 実測中止。3月12日(晴れ) 1・2号墳の石室実測と地形測量を行う。

3月13日(晴れ) 石室の石をユンボで吊り上げ、精査を行う。近世墓1・2実測。

3月14日(雨) 丹有教育事務所にて2号墳の象嵌大刀を記者発表する。

3月17日(晴れ) 1・2号墳調査を終了する。石鍬出土グリッドの土層断面図を作成する。

3月18日(晴れ時々曇り) 日本道路公園三田工務所と管理引継を行い、調査を終了する。



挿図9 1号墳石室調査



挿図10 現地説明会

第3節 整理作業

昭和61年冬の発掘調査において高川古墳群から出土した遺物（遺物整理箱25箱の土器・石器と金属器106点）について、兵庫県教育委員会は昭和63年、平成元・2年度にわたって、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町）において整理作業を実施した。

整理作業は、水洗→ネーミング→接合・復元→実測・拓本→写真→トレース→レイアウトの各工程を経て原稿執筆→印刷→報告書刊行となる。水洗と接合作業の一部は昭和61年に現場事務所を終了し、兵庫県埋蔵文化財調査事務所ではネーミング作業から開始した。

遺物の整理は、遺構図の浄書とあわせ行った。

金属器は冬の雪や霜柱の影響の多い季節に調査を行ったためか、錆の浸食が著しいものが多く、また、銀象嵌大刀や破砕した耳環、金銅製及び鉄地金銅製の製品など処理の困難な遺物も含まれていた。そこで、奈良国立文化財研究所保存科学研究室の沢田正昭氏らの指導を受けながら、加古千恵子のもと金属器処理班が慎重に作業を行った。

写真については写真家 森 昭氏及び横山英俊氏（吉田カメラ商会及びサンスタジオ）に委託し撮影を行った。

整理作業の組織

事業主体	兵庫県教育委員会
整理作業主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（平成元年4月より）
整理作業体制	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 整理普及課（平成元年4月より）

整理作業班

調査員	主査 岡崎正雄、技術職員 中川 渉、技術職員 藤村淳子
補助員	高島知恵子、出田恵子、松本 睦 野村純子、尾崎比佐子、植田弥生

第4節 出土金属製品の保存処理作業

高川古墳群からは金属製品は106点出土した。遺跡から出土した金属製品は長い間土の中に埋もれていたために腐食が進行しており、保存処理を施さずに放置していると錆が進行してバラバラになってしまい、もとの形状を復元することは不可能となる。とくに、本遺跡では発掘調査直後に、銅等が付着したまま出土した鉄刀の一部のX線透過試験を奈良国立文化財研究所に依頼したところ、象嵌が施されていることが判明、その他の出土金属製品も腐食が甚だしいため早急に保存処理を行う必要があったが、他の整理作業との兼ね合いから2年間はアルコール含浸にて保管、平成2年度に保存処理作業を実施した。

1. 鉄製品の保存処理

出土した鉄製品には刀・鎌・馬具・釘など約95点で、鉄地金銅張製品の馬具が8点含まれている。以下、鉄製品の保存処理工程を示す。

- ①保存処理作業前の形状観察記録・写真撮影を行い、処理台帳を作成する。
- ②脱塩処理を行う。——表面の泥を落とした後、遺物中の塩化物を除くために、水酸化リチウムの0.2%アルコール溶液（エタノール・メタノール・イソプロパノールの混合液）に含浸、溶液16の交換を繰り返したのち3ヶ月後引上げ、メタノールで洗浄、乾燥保管する。
- ③X線透過試験を行い、内部構造を調べる（奈良国立文化財研究所に依頼）。このときに鉄片のなかにも象嵌が確認され、銅の残片あるいは他の刀装具の一部と思われた。
- ④脱塩処理後、遺物が脆弱なため非水系アクリル樹脂（商品名：バラロイドB72）の10%トルエン溶液内で減圧含浸して仮強化を行う。
- ⑤X線撮影フィルムで形状を確認しながら、小型グラインダーにて錆の部分进行を削り落とす。また、噴射加工器にてアルミの微細粒を高压で吹きつけ、細部を仕上げる。鉄地金銅張のものは高速用の小型グラインダーで錆をおおまかに削り落したのち、低速用小型グラインダーで鍍金面直上まで錆を慎重に削り、メスで錆の薄層をはがし鍍金面を表出する。
- ⑥非水系のアクリル樹脂（商品名：バラロイドNAD10）内で真空樹脂含浸する。
- ⑦真空樹脂含浸した金属物を常温で乾燥させ、熱風恒温乾燥機内に入れ70°Cで1週間かけ強制乾燥させる。
- ⑧⑥と⑦を4回繰り返した後、折損部をα-シアノアクリレート系接着剤（商品名：ポンドアロンアルファ）・エポキシ系接着剤（商品名：セメダインハイスーパー）にて接着し、欠損部分はエポキシ系補填剤（商品名：ポンドオール）にて補填する。
- ⑨保存処理の終了した遺物をビニール袋内にシリカゲルを封入して密閉乾燥保管する。



挿図11 実体顕微鏡による象嵌表出作業

2. 銅製品の保存処理

出土した銅製品には金銅製鈔1点、耳環5点、銅環1点、銅銭3点がある。以下、保存処理工程を示す。

- ①処理台帳を作成する。
- ②脱塩処理——ベンゾトリアゾールの0.3%メチルアルコール溶液内で30分減圧含浸したのち乾燥。
- ③X線透過試験を行い、内部構造を調べる。耳環は内部が空洞のものがあり、ソフトX線を使用してみると合わせ幅を確認することが出来た。
- ④パラロイドB72の5%トルエン溶液内で減圧含浸。
- ⑤1日常温乾燥後、乾燥機内で1週間強制乾燥する。
- ⑥④と⑤を5回繰り返す。
- ⑦パラロイドB72の10%トルエン溶液内で減圧含浸を行う。
- ⑧⑦と⑤を3回繰り返して内部を強化した後、噴射加工機にてガラスの微細粒を高压で吹きつけたり、耳環等はメスを使用して錆を落とす。
- ⑨接着は α -シアノアクリレート系接着剤(ポンドロンアルファ)を使用。耳環の接合面は薄いため、ガラスクロスを裏打ちして接合した。
- ⑩⑦を行い、表面を樹脂膜で保護したのち乾燥させる。
- ⑪保存処理の終了した遺物をビニール袋内にシリカゲルを封入して密閉乾燥保管する。

3. 象嵌製品の保存処理

出土した鉄製品のなかでX線透過試験によって、刀の鏢・鈔・黄金具・刀装具と思われる金具など4点に象嵌が確認された。象嵌はすべて銀象嵌である。

鈔は、再度ステレオX線透過試験を行い、象嵌の文様の表裏の分離作業をした。低速用の小型グラインダーを使用して錆層を慎重に削り落とし、必要に応じてX線透過試験を行い象嵌を確認しながら表出を行った。鈔となる破片については出来る限り復元を行い、欠損部分についてはポンドールによって補填した。鉞も同様にステレオX線透過試験を行い、象嵌の文様の表裏の分離作業をした。低速用の小型グラインダーで錆を削り落とす作業の途中に前面に象嵌が確認されて、再度刀身を斜めにしてX線透過試験をし、象嵌を確認したのち表出作業を行った。刀装具と思われる金具の象嵌の保存度は悪いため樹脂含浸のみ行った。



挿図12 銅製品の減圧樹脂含浸



挿図13 鉄製品の真空樹脂含浸



挿図14 樹脂含浸引上げ作業



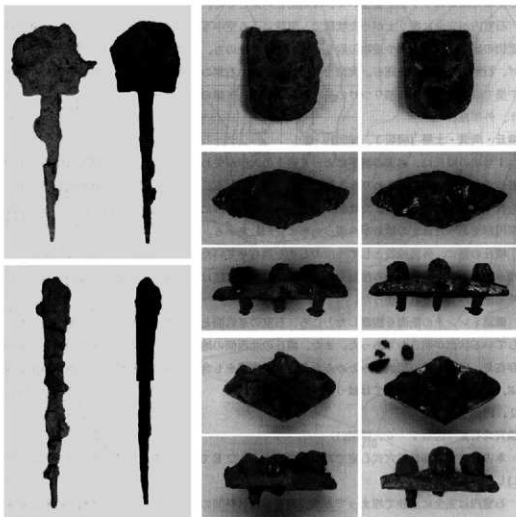
挿図15 鈔取り作業



挿図16 鍮・象嵌の表出工程
(処理前→途中→処理後)



挿図17 鍮・象嵌の表出工程
(処理前→途中→処理後)



挿図18 保存処理された鉄製品（処理前・処理後）

第5節 1号墳の調査

調査の方法

現況で露出していた石から推定した主軸方向をもとに行われた確認調査のトレンチによって調査区を設定した。羨道部から奥壁に向かって、手前の左側から時計回りに1区から4区とした。調査期間は厳冬期にあたり、現地はしばしば雪に見舞われ、また霜柱による被害も見込まれたため、石室内を精査する期間には、単管を組みブルーシートを張って石室の覆い屋を設定し、また床にはワラゴザをひいて、凍結防止対策とした。

石室内が完全に掘り上がった状態で、気球による空中写真の撮影を行った。また、石室及び遺物の出土状況の実測や遺物の取り上げが完了したのち、石室の石は全てバックホウで吊り上げ、石室の基底面を確認し、実測を行った。なお、石室の実測に当たって、墨壺を用いて朱墨や墨で直接地面や石に割りつけの基準線を引いて、実測の便を計った。

1. 外部施設

墳丘・周溝・土層（図版3、挿図19・20）

1号墳の墳丘は、過去の削平によって盛土の大半が失われている。特に東側と南側の削平が著しく、石室の床面がまわりから浮いた形で残っている。1号墳の南西には調査直前まで用いられていた山道が通り、また北側にはおそらく中世墓群に伴うと思われる道が通っており、本来円形であったはずの墳形が角張った形に変形している。

墳丘の裾に、外覆施設として一段の石列を巡らせていたらしく、羨門の左側に3石が並んで残っていた。この石列から推定して、本来の墳丘の直径は11m前後と推定される。なお、葺石や埴輪はみとめられなかった。

確認トレンチの断面を観察したところ、石室の基底面として地山を削って平地地をつくりだしている状況が明らかであった。また、墳丘の北西側の地山を掘削した三日月状のカット面の存在や、山側の浅い周溝もみとめられる。この周溝をも含めた古墳の規模は、東西約14mに及ぶ。しかし、盛土についてははっきりしなかった。

2. 内部主体

横穴式石室（図版5・6、挿図21）

本古墳の主体部は横穴式石室である。主軸は、N22°Eであり、斜面にほぼ直交する方向に開口している。

石室内は完全に土砂で埋まっており、調査前には林間の若干の高まりの中に数個の石が姿をのぞかせているだけの状態であった。調査が進むにつれ、右側壁の前半は大きく土取りで削られていることが判明した。石室は、比較的大型の石を何段か積んだ後その上に天井石を架して

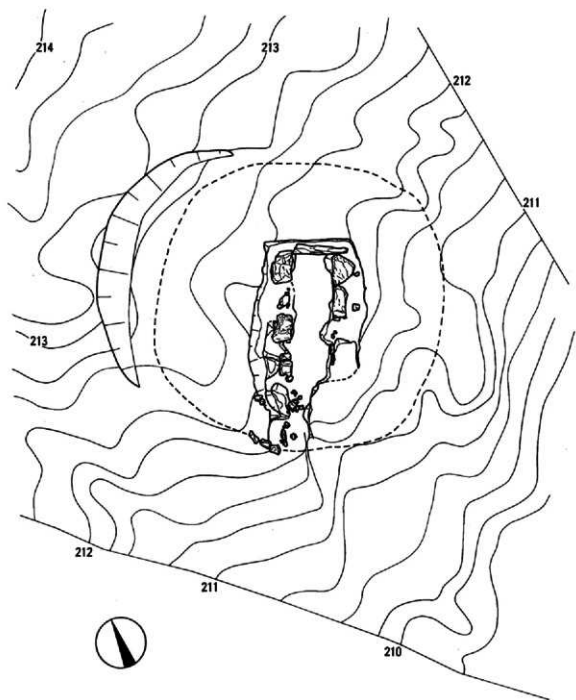
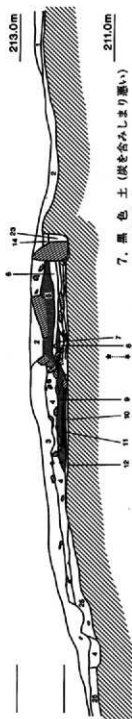
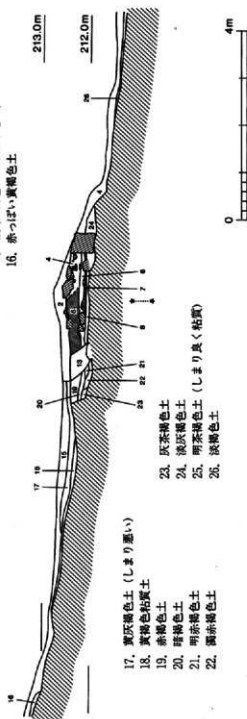


插图19 1号墳地形測量図



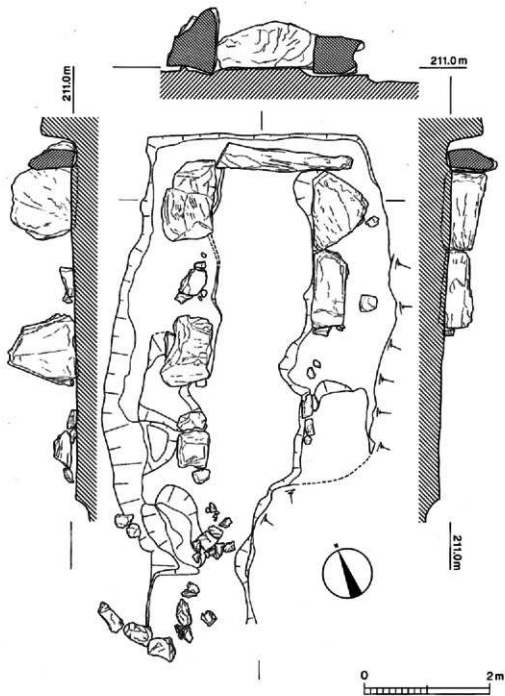
1. 黄灰褐色土 (砂っぽい)
2. 黄灰褐色土 (ややしまり悪い)
3. 淡茶褐色土
4. 暗茶褐色土 (しまり悪く土器、礫を含む)
5. 黒色土 (炭を含みしまり悪い)
6. 灰褐色土 (炭を含み粘質)

7. 黒色土 (炭を含みしまり悪い)
8. 暗褐色土
9. 黒灰色土 (炭を含み粘質)
10. 黒灰色土 (炭を含みしまり悪い)
11. 暗褐色土 (炭を含む)
12. 暗黄褐色土
13. 淡茶褐色土 (礫を含む)
14. 明茶褐色土
15. 暗黄灰褐色土 (しまり悪い)
16. 赤っぽい黄褐色土



17. 黄灰褐色土 (しまり悪い)
18. 黄褐色粘質土
19. 赤褐色土
20. 暗褐色土
21. 明赤褐色土
22. 濁赤褐色土
23. 灰茶褐色土
24. 淡灰褐色土
25. 明茶褐色土 (しまり良く粘質)
26. 淡褐色土

插图20 I号墳横丘断面図



挿図21 1号墳石室実測図

いたと推定されるが、過去の採石によって、天井石および2段目以上の石は全て取り去られている。石室内の埋土にはかなりの量の割れた石が落ち込んでいた。

奥壁の石の厚みは最大でも0.4mとかなり薄く、この上にもう一段石を積めるかどうかきわめて難しいような石である。掘り方をみても奥壁がもとはもっと厚みのある石であったとか、この石の裏にもう1石並べてあったとは考えにくい状況であった。

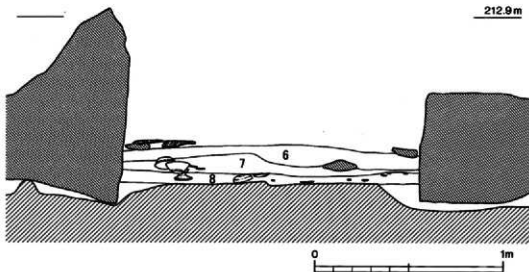
側壁は、山側左壁に2石、谷側右壁に2石残っている。山側にはほかに2石分の根固め石とさらにもう1個の石の抜き取り穴がある。谷側にも石の抜き取り穴と根固め石がある。山側の石はほぼまっすぐに並んでいるので、谷側を袖とする右片袖の石室と推定される。奥から3石目ないし4石目が袖石と考えられる。山側の石に比べて、谷側の石は低く厚みのある石を並べている。また、石をうまく据えるためにその下を浅く溝ないし土壇状に掘り下げている。

石室の規模は、墳丘裾の石列から奥壁までが7.4m、主軸の残存長5.8m、奥壁内法1.5mであった。また、上記の復元推定では玄室長5.0m、玄門幅1.1mになる。

床面の奥壁付近右寄りに、棺台であつたらしい石がいくつか残っている。石室全体に敷き詰める敷石はみとめられなかった。また、羨道部中程の左壁寄りに幾つかの石がかたまっており、閉塞石の可能性がある。

石室内の基本的層序（図版5、挿図22）

石室内の埋土にはかなり多くの石が落ち込んでいた。この埋土をあぜを残し徐々に掘り下げたところ、1・2区に黒色土の広がりを検出した。この土は炭が混じり、浅い土壇を埋めるように堆積していた。この面で近世丹波焼の摺鉢と磁石、鉄鎌が出土している。



挿図22 1号墳石室内遺物出土土状況模式図

丹波焼の播鉢を除去してもう一層掘り下げると、古代から中世にかけての遺物があらわれ石室の再利用にかかわるものと思われた。これらの遺物の出土する層には炭が含まれ、汚れたしまりのわるい土であった。この層において、一部の古墳時代の遺物が姿をあらわしている。また、この層は石室の右手ほど薄く、この付近では副葬品と再利用の遺物がほぼ同一のレベルで検出された。

石室の古墳時代の床面は一面だけで、副葬品は多くが床面に近い高さで検出された。床面近くの土は比較的きれいな土であった。

3. 古墳時代の遺物

遺物の出土状況 (図版5・6・7、挿図23・24)

1号墳では古墳時代の副葬品の量がかなり多かったため、土器と鉄器その外の遺物の2枚の図面にわけてその出土状況を示した。土器については、原位置で取り上げた破片の接合関係を破線で示している。鉄器のままとって出土した部分については拡大して示してある。また挿図24でドットで示しているのはガラス玉である。

遺物の出土箇所は大きく以下の3箇所に分けられる。Ⅰ) 奥壁右隅より(3区)、Ⅱ) 玄門部左(1区)、Ⅲ) 奥壁左隅手前(3区)である。

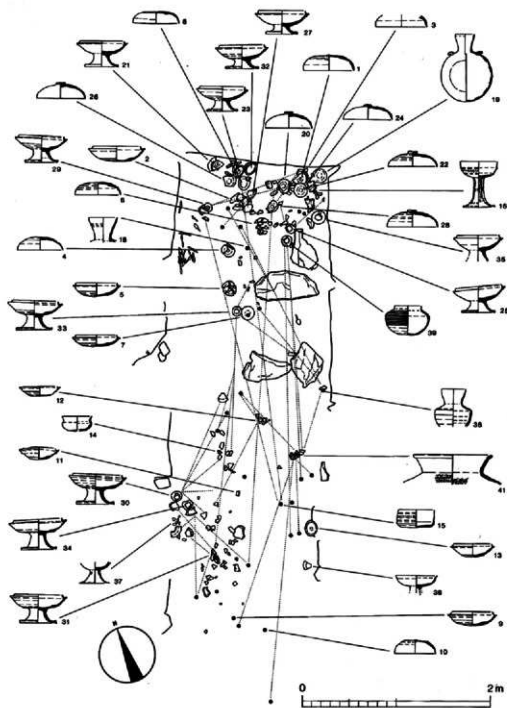
Ⅰ) では、提瓶・短頸壺・有蓋高杯・無蓋高杯などの須恵器の他に、耳環1組と、40点余りのコバルトブルー主体のガラス小玉の一群がある。土器はほぼ完形に近いものが多い。また、接合関係をみても、Ⅱ) に比べ余り土器が動いていないことがわかる。しかし、高杯や杯の身と蓋が組みあったものはなく、遺物が副葬された当時の原位置をとどめているのではなく、追葬時に片付けられた状況を示すようだ。また、接合関係から、遺物の小片が奥壁付近から羨道方向へ引き出された動きがみとれる。

Ⅱ) には有蓋高杯・杯身といった須恵器と、耳環1組、鉄鏃1点、刀片らしき鉄片1点がある。須恵器は杯身11~13や杯蓋10のような新しい時期のものを含んでいる。おそらく追葬に伴うものであろう。Ⅰ) に比べ土器の破損の度合いは進んでおり、左側壁寄りの須恵器には完形を保っていたものはなかった。30・34といった高杯の脚部は壊れずに立ったままであるが、杯部は細かく砕けており、その破片の散らばりの範囲は広い。

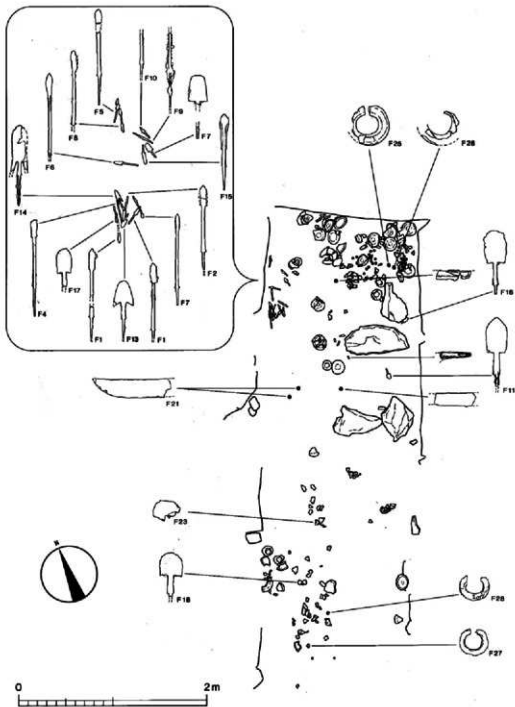
Ⅲ) では、鉄鏃が15本くらいままとって出土している。鏃の先の方向は揃っておらず、矢を束ねていたそのままの状況ではない。F1~F8の長頸鏃は全てこの一群から出土している。

鉄器については、F11・F16・F11のやや大型の3点の鉄鏃(Ⅲ) 以外から出土している。ほかに刀の破片F21・F20・F22や刀子の柄F24がばらばらな所から出土している。なお、確認調査で金銅製の鐔が出土しており、装飾大刀をもっていたことが明らかである。

石室外ではままとった遺物群はみられない。ただし、完形の無蓋高杯が1点だけ周溝4区から出土している。



挿図23 1号墳石室内副葬品（土器）出土状況図



挿図24 1号墳石室内副葬品（鉄器ほか）出土状況図

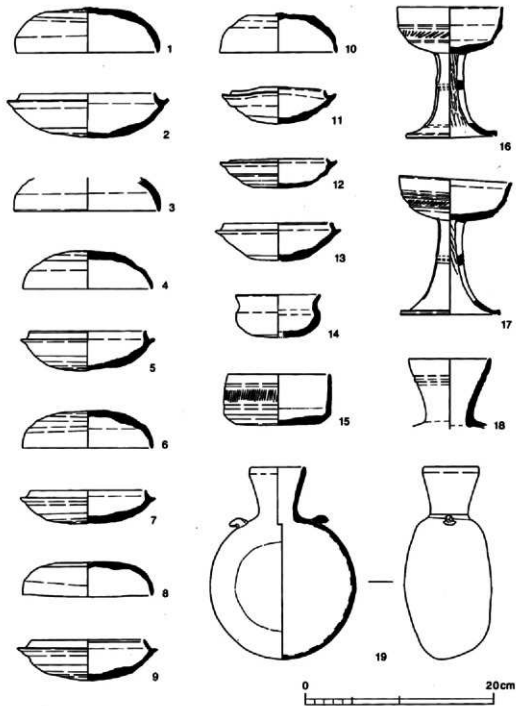


插图25 1号墳須惠器(1)

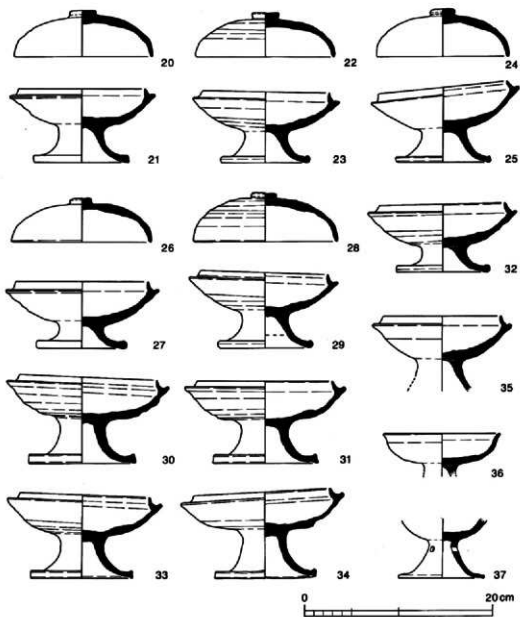


插图26 1号填须惠器(2)

須恵器 (図版19・20・24、挿図25~28)

古墳時代の須恵器の器種には、杯身・杯蓋、有蓋高杯、有蓋高杯とその蓋、椀、提瓶、短頸壺、甕などがある。同時期の土師器は見当たらない。

この古墳では、個体数が一番多いのは有蓋高杯であり、杯の方が少ない。

有蓋高杯(21・23・25・27・29・30~32・37)の脚は比較的低く、いわゆる短脚の高杯である。短脚の脚部のみの個体37に円形の透かし孔が3方向に穿たれていた以外は、みな脚部に透かしがない。焼成が悪く、灰白色で生焼け状態のものも多い。(21・23・25・27・30・35)これらは、調整技法などの観察も困難である。この古墳出土のほかの器種では杯蓋6がやや軟質であるが、このように軟質のものはみとめられない。脚端部のおさめかたは、面をなすものと丸くおさめるものに大別でき、焼成のよい30~34はみな面をなすつくりである。脚部取りつけ後の処理にもいくつかの技法がみとめられる。蓋(20・22・24・26・28)は扁平なつまみをもつもので、28が緑灰色である以外はみな灰白色のきわめて軟質のものである。

無蓋高杯は16・17 および36の3点である。16・17は長脚の高杯で、2段2方向の長方形の透かしをもっている。色調は暗灰色~暗青灰色で、この古墳出土の遺物の中ではめだって暗い色あいである。また、17は石室外の周濠内4区から出土している。36は杯部のみであるが、おそらく短脚の高杯になると思われる。

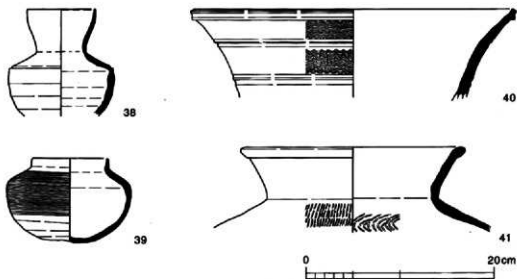
杯(1~13)は、陶器編年ではTK43型式からTK209型式にあたるものと思われる。身と蓋のセットは明らかではなく、出土状況などから図上で仮に復元してみた。1・2のセットが最も古く、4~9はそれより新しいと考えられよう。10~13がTK209型式末にあたる最も矮小

したタイプで、追葬の下限の時期を示すものである。その杯身(11~13)の中で、12の底部にはかなり広い範囲で丁寧なヘラ削りが施されており、ヘラで切り離したままのほかの2点とは異なっている。調整だけでなく胎土も異なっている。この違いは時間的なものでなく、生産者の違いによるものであろう。

杯蓋8の天井部外面には一文字のヘラ記号が付されていた(挿図27)。この個体には火罨があった。また、杯身2の内面には、重ね焼きの際の「砂痕」のような輪状のざらざらした部分がある。



挿図27 須恵器ヘラ記号



挿図28 1号墳須恵器(3)

碗(15)は青野ダム遺跡群など三田盆地でしばしば見られる特徴的な器種である。胴部に刺突文を施し、底部は丁寧にヘラ削りを行っている。

埴(14)は小型の壺であるが、貯蔵用というより供膳具の一種であろう。

提瓶(19)は、肩に小さく突起状の把手がつく完形品のほかに、口縁部の破片(18)が出土している。19は奥壁右手のコーナーにたてかけるようにしての出土である。

38は小型の壺、39は短頸壺である。38は底部を欠くが、胴部下半にヘラ削りを施す整美な形態をしている。短頸壺39は体部上半にカキ目が施されている。頸部に蓋の重ね焼き痕が残る。口縁部から体部上半にかけての破片は、口を下に向けて倒立した状態で出土している。

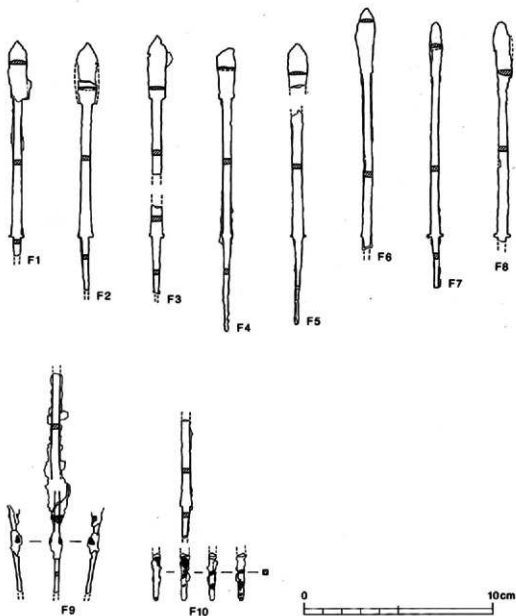
壺は口縁部が2個体分(40、41)出土している。40は2段の波状文が施されている。

1号墳に副葬された須恵器は、時期としては6世紀中頃から7世紀初頭にわたる時期のものと考えられる。そして、ほぼ同じ時期の同じ器種のなかにも、胎土、焼成、製作技法上の差異がみとめられ、産地の違いを考える必要がある。

鉄器(図版26・27、挿図29～31)

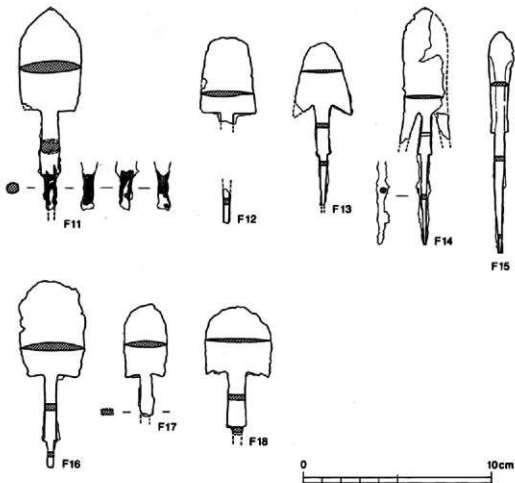
1号墳から出土した鉄器で図化可能なものは26点であった。第4節にあるようにいずれも遺存状況は悪く、処理作業は難航した。しかし、レントゲン写真をもとに慎重に錆落とし作業を行ったので、鉄鍔の棘寛被(とげのかつぎ)など細かな部分についても明らかにすることができた。

鉄器の内訳は、鉄鍔19点、刀子1点、鎌が2点、不明品が1点そして刀剣の破片である。ただし、鎌については、古墳時代以降のものであることが明らかなので、後に述べる。



挿図29 1号墳鉄器(1)

鉄器のうちF1～F8の8本が長頭鉄であり、F11～F18が短頭鉄である。F9～F10はおそらく長頭鉄の茎（なかご）である。短頭鉄のうちF15だけが細身の鉄身で、他は幅広い鉄身をもつものであった。全体に保存状態は悪く、茎の下端まで残っているものは少ないので、全長の不明なものが多い。

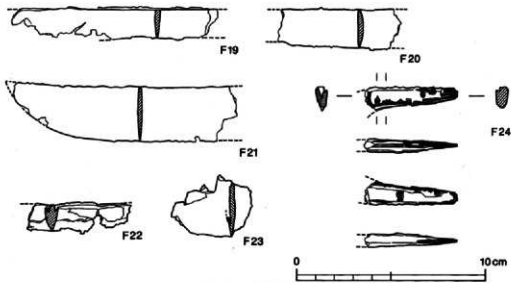


挿図30 1号墳鉄器(2)

長頸鉄の鉄身部の形は、関(まち)のはっきりした柳葉形のF1~F4・F6と関のない鑿箭(のみや)式のF7・F8と二つのタイプがある。しかし、基本的には全て鑿筈被をもつ。鉄身部の長さ約3.5cm、幅約1cm、先端から筈被までが約11cmと長さや幅の規格性が強い。鉄身部の断面形もみな片丸である。

それに対して短頸鉄は、F13・F14のように逆刺(かえり)のあるものやF16・F17のように逆刺のはっきりしないもの、逆刺が二重になった重抉(かさねえぐり)のF18など鉄身の形や長さや幅、筈被の有無などの変化に富む。というより、同形・同大の鉄はなく、さまざまな種類の鉄が集められているようである。おそらく用途なども異なっていると考えられる。

なお、F9~F11・F14の基部には、矢柄の木質ないし矢柄と鉄を巻いて固定していた繊維が付着していた。

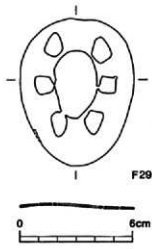


挿図31 Ⅰ号墳鉄器(3)

F19～F23は刀の破片である。F21は刀の切先の破片で、幅約3cmのフクラ切先である。F19、F20は同一個体に属するものらしいが、F21とは厚みや幅が異なっており、F21とも同一個体か否かは判断できない。F22・F23は剝離が著しく元の形や厚みは不明であるが、一応刀の破片と考えている。いずれもF19やF21と同一個体とは考えにくいものである。他にも剝離した薄い破片が何点かあるが図化していない。F24の刀子は柄の部分で、木質が残っている。

金銅製の鐏 (図版25、挿図32)

確認調査トレンチの排土からの出土であるため、出土状態については不明である。倒卵形六窓式の金銅製の鐏で、透かしの形は台形である。鐏自体は厚さ0.6～7mmの扁平な銅板の両面に鍍金を施したものである。金銅板の風化の程度はかなり著しく、金箔があちこちめくれあがっており地の銅板も薄い緑色の緑青をふいている。重さは17.82g。



挿図32 Ⅰ号墳金銅製鐏

こうした倒卵形六窓式金銅製の鐏をもつ大刀としては圭頭大刀または頭椎(かぶつち)大刀が考えられる。この鐏はこの種の鐏の中でも特に薄手で華奢なものであり、実的なものではない。類例をみると、鞘なども金銅板でおおった華麗な大刀が多い。しかし、この古墳ではほかの刀装具はまったく出土しなかった。

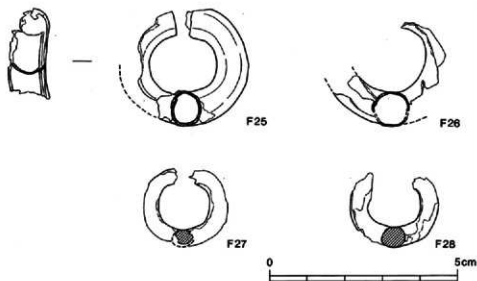
耳環 (図版25、挿図33)

奥壁付近と羨道部からそれぞれ2個ずつ2組の耳環が出土しているが、いずれも腐食が著しく、遺存状況は良くなかった。

奥壁付近出土のF26とF27は復元直径3.1~3.4cmとやや大ぶりて、太さも7mm程度でやや太い。内部は空洞のいわゆる中空耳環である。重量はF26が3.34g、F27が残存重量1.25gであった。検出時にはほぼ完形に近い状況であったが非常に脆弱な遺物で取り上げ時にこわれてしまった。また金箔が剝離している部分もあり、保存処理の手をわずらわせた。しかし、幾つかの破片に分かれているために、完形品ではみることのできない中空の環の内側の観察が可能であった。そこで環の内側や断面を肉眼で観察すると、銅板が重なって段になっている部分が明らかであった。奈良国立文化財研究所に分析、鑑定をお願いしたところ、付載の村上 隆氏の別稿にもあるとおり、銅板を丸めて長辺を重ね合わせて中空の円環を作成し、そののち鍍金をおこなうという中空金環の制作技法を明らかにした貴重な資料となった。

羨道部出土のF28・F29はいずれも表面の箔が大部分剝離している。残った部分の箔は肉眼でみたところほとんど銀色で、環の内側のみが金色を帯びている。芯は緑青が吹き、淡い緑灰色を呈している。F28・F29は中実の銅環を芯として鍍金を施したものと思われる。直径は2.2cmとF26・F27に比べやや小さく、太さも6mm程度と細めである。重量はF28が4.09g、F29が5.02gであった。

F26・F27とF28・F29は、製作技法も大きさも異なる。奥壁付近出土のF26・F27は最初の埋葬に伴うものであり、羨道部出土のF28・F29は追葬に伴うものとも考えられる。

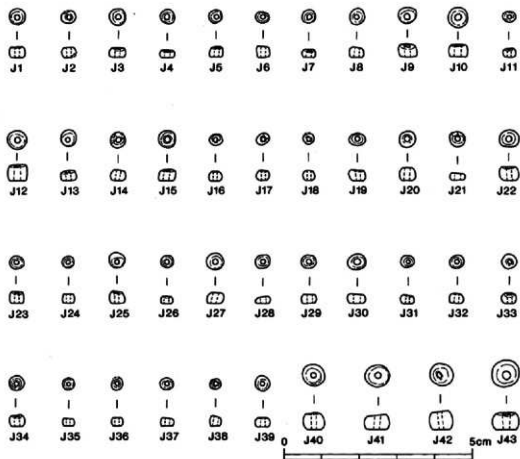


挿図33 Ⅰ号墳耳環

ガラス玉 (巻首図版4、挿図34)

出土したガラス小玉の総数53点であったが、取り上げや水洗いの過程で10点が破損してしまった。ほとんどの玉が3区の奥壁右隅付近からの出土である。ここからはF26とF27の中空耳環の対も出土しており、装身具の出土が集中することから、このあたりに遺体が置かれていたことが推測できる。なお石室内の土を水洗して拾い上げた玉は14点であった。

計測可能な玉43点からみると、玉の大きさは直径約3～5mm、厚さは2～3mm。色は34点がいわゆる紺碧色のコバルトブルーであり、それよりややくすんだ藍色がJ5・J16・J17・J18・J41の5点、水色に近い淡い青色がJ8・J29・J36の3点、そして青緑がJ2の1点であった。なお、直径6mm以上の大きめの玉が3点あるうち、J41が藍色で、J42・J43はコバルトブルーであった。5mm以上の玉は4点で、これらは全てコバルトブルーであった。ガラス玉以外の玉は出土していない。



挿図34 Ⅰ号墳ガラス玉

4. 再利用時の遺物

遺物の出土状況（図版4、挿図35）

古墳時代以降の遺物として、奈良時代の須恵器杯B、平安時代の須恵器杯・碗・黒色土器碗、鎌倉時代の須恵器碗、江戸時代の丹波焼の播鉢・鉄鉢・磁石、ほかに銅銭が出土している。これらの遺物はほとんどが完形に近い形で羨道部などに据えられたような状態で炭を伴って出土しており、いわゆる再利用に関係する遺物と考えられる。

最初の再利用の時期は、8世紀半ばころである。須恵器杯B（42・43）がその時期を示す遺物で、羨道部左から出土しているが、副葬品と殆どかわらないレベルからの出土である。そのすぐそばから出土している黒色土器碗（50）は、9～11世紀のものである。黒色土器碗（51）も羨道部付近の出土であるが、この時期は12世紀後半と考えられる。これとほぼ同じ時期のものとして、須恵器の碗（44～47）がある。44は石室奥でいくつかの破片に分かれて散って出土したが、47・45は羨道部脇から完形で出土している。

そして江戸時代の丹波焼播鉢（55）は、羨道部の側石の根元にほぼ完形のまま上向きに置かれたような状態での出土である。その近くには炭を含んだ黒色土が広がっており、鉄鉢（F30）と磁石（S1）が出土している。

1号墳の石室は、このように断続的ではあるが長期にわたって再利用されてきたことが判明した。

土器・陶器（図版23・24、挿図36）

奈良時代の須恵器杯B（42・43）は、いずれも底部の高台の内側に爪形文がめぐっている。

須恵器碗（44～48）の底部はみな糸切りである。44・45は底部と体部の屈曲が明確で口縁部にかけて直線的に開き、46～48は体部から口縁部にかけて丸みもちながら内弯気味に開く。時期は、12世紀後半から13世紀始めのもので、44・45はやや新しく13世紀始めに下る。

53は糸切りの須恵器の底、54は底部糸切りの須恵器の小皿である。須恵器碗（44～48）と同時期のものであろう。

49は土師器の杯である。52も土師器で、底部は不調整である。いずれも詳しい時期は不明である。

50の黒色土器Bは、口縁部が欠損しており、推定復原による図である。51の黒色土器も小さい破片からの復原である。胎土は粗く、焼成も悪い。

55の丹波焼播鉢は内面に7本1単位の工具による櫛目がつけられている。色調は赤褐色で、砂粒をかなり多く含むざっくりした感じの胎土である。櫛目は磨滅しておらず、未使用または、短期間しか播鉢として使用されなかったものようである。

56は丹波焼の浅い鉢で、墳丘西裾からの出土である。口縁は2cm単位で波うっている。茶褐色の業地に焦げ茶色の釉が口縁部外面にかけられている。

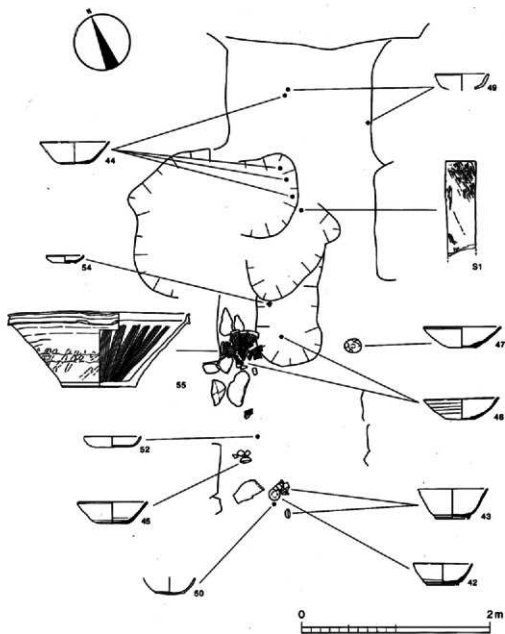


插图35 1号石室再利用遗物出土状况

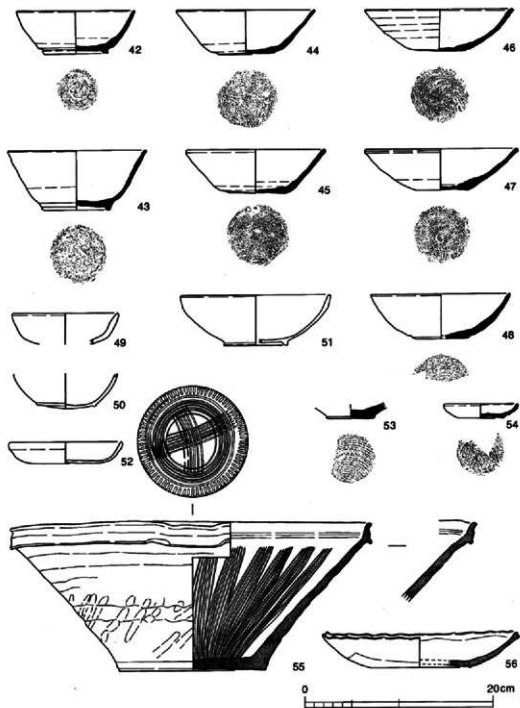
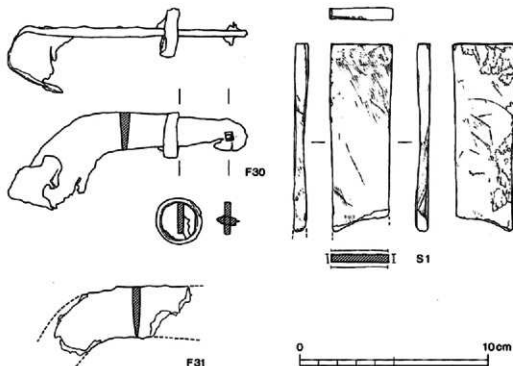


插图36 I号墩再利用土器



挿図37 I号墳石器・鉄器

鉄器 (図版27、挿図37)

再利用の鉄器は鎌が2点である。

F30は曲刃の鎌で、明らかに近世以降のものであり、丹波焼播鉢(55)の奥にあたる石室左手の黒色土の広がりの中から出土している。先端は折れ曲がり、柄の口金と止め釘が錆びついていた。F31も曲刃の鎌が弯曲する部分の破片で、刃先はなく出土場所も不明である。F30と同じくそう古いものではないと考えている。

ほかに羨道付近で銅銭(順享元宝：初鑄1068年)が出土している(図版24)。遺存状態が悪く脆弱なため拓本はとっていない。

砥石 (図版24、挿図37)

F30付近から出土している。肌理の細かい凝灰岩を素材とする。薄手の小型砥石でその石質から仕上げ砥用と思われる。一端を折損するが、現存部分のほぼ中央付近が使用によりわずかに凹み、細かい線状痕が多方向に観察される。両側面にも研磨による線状痕が残る。残存長9.9cm、幅3.2cm、厚さ4.5cm重さ35.5gを測る。

5. 小結

1号墳は石室の遺存状況が極めて悪かったわりには、土器・玉類などの遺物がかなりよい状態で残っていた。ただ、金属製品が金銅製の鐔以外には鉄鏃・刀子・刀片とやや貧弱である。玉類もほとんどがこの時期ではごくありふれたコバルトブルーのガラス小玉である。副葬品としての須恵器の年代は陶邑編年¹⁾と対比して、6世紀中頃から7世紀初頭におわたると考えられる。中空耳環を含む耳環が2セット出土していることや、須恵器の年代に幅があることから、単体の1回限りの埋葬でないことは明らかである。また、奈良時代から江戸時代にわたる長期の再利用は、古墳が藍本から丹波へ抜ける山道沿いという交通の要所に立地しているからであろうか。

この古墳の特徴的な副葬品である金銅装の鐔の泉下の類例をみると、和田山町長尾の金銅装頭椎大刀（六窓）、同町上山5号墳（春日古墳）の金銅装大刀（八窓）、村岡町天堂古墳の金銅装頭椎大刀（六窓）、そして城崎町二見谷4号墳の金銅製の鐔そして三日月町高畑2号墳の金銅装大刀（六窓）がある。これらの大刀の鐔は、端部がいずれも断面T字形で、覆輪（縁金）をもち、厚さは2mm程度である。それに比べて、高川1号墳の鐔は覆輪がなく非常に薄い。

この種の倒卵形の鐔を持つ大刀としてまず考えられるのは金銅装の頭椎大刀で、鞘なども打ち出しの金銅板でおおった華麗な装飾をもつ非実用的なものが多い。金銅装の大刀としては環頭大刀もあるが、大陸や半島の影響のもと成立した環頭大刀は、いずれも刀身から大きくはみ出す倒卵形の鐔は伴わない。それに対して頭椎大刀および圭頭大刀は倒卵形の鐔をもっており、同じ装飾大刀でも両者の大刀造りの「流儀」は明確に異なっている。こうした装飾性の強い頭椎大刀の中でも、1号墳出土の鐔はことに実用性の薄いものと思える。

なお、豊富に出土した遺物である古墳時代の須恵器については、胎土、焼成そして形態・調整上の特徴から複数の生産地からもたらされたことが明らかである。

杯蓋6、有蓋高杯27・35、高杯蓋22・24・26は三田盆地中部、武庫川右岸に所在する平方窯跡群出土の可能性が考えられるという²⁾。また、口径は縮小しているがヘラ削りの著しい杯身12あるいは杯身7、杯蓋8、碗15、塔14、短頸壺39、長脚の無蓋高杯16・17は、胎土の特徴などから同じく三田盆地中部でも武庫川左岸の青野地域の末窯跡群の製品ではないかと思われる³⁾。現在平方窯跡群の遺物は整理途中であり、末窯跡群の製品を含め胎土分析などによる同定は今後に期待したい。

註 (1) 田辺昭三「陶邑古窯址群」I 1966年

(2) 兵庫県教育委員会調査 篠宮正氏御教示

(3) 兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査(1)」1987年

兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査(2)」1988年

第6節 2号墳の調査

1. 外部施設 (図版9、挿図38・39)

1号墳と同様、2号墳においても盛り土はほとんど失われており、特に南側と東側は大きく削り込まれて、石室が浮いたような状態であった。このため、南半部について墳丘の形状・規模などを復原するのはほぼ不可能である。しかし、北半部では墳丘・周溝の築造に伴うと考えられるカット面が遺存しており、旧状を推し測る手掛かりとなっている。カット面は2号墳の北半部を半円状に囲んでおり、東西の幅が約12m、北端から石室の中心までの距離が約7mを測る。カットによる段差は西側で約1m、北側で約1.5mを測る。周溝の埋土は、西側で僅かにその痕跡が認められる他は全く残っておらず、削平の激しさを物語っている。以上のカット面および西周溝の痕跡から復原される墳丘の形状・規模は、東西径9m、南北径10m程度の楕円形をした円墳が想定できる。

2. 内部主体 (図版10・11・13・15、挿図40)

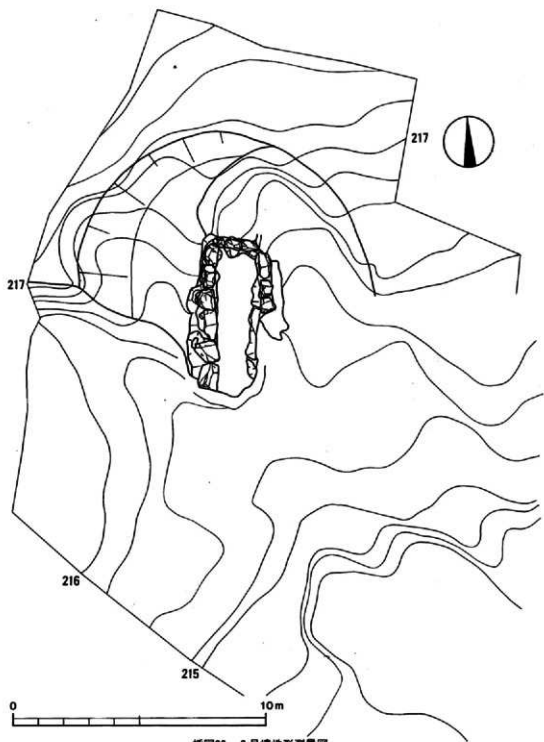
主体部は横穴式石室で、斜面に対して直交方向に主軸をとり、南に開口している。主軸の方位はN6°Eで、ほぼ真北に近い。遺存状況は非常に悪く、石室は崩壊した上に、相当数の石材を持ち去られたようである。崩壊し、山積みとなっている石材を取り除いた結果、玄室の基底石のうちの奥壁の3石と、西側壁の6石、東側壁の3石のみが原位置を保っていることが判った。現状から当初の石室の形態および規模を復原するのは極めて困難であるが、残された手掛かりからある程度推定することは可能である。

検出した石室の規模は奥壁付近の内法が1.6m、西側壁の延長が5.6m、東側壁の延長が2.3m、主軸線上の延長が5.7mである。直線的な西側壁に対し、東側壁は途中で失われて判然としないものの、床面が徐々に狭くなって、南端から2.2mの間は1m強の幅を測る。この間が羨道部であるとすると、玄室の全長3.5m、幅1.6m、羨道部の幅1m強の右片袖式の石室が想定できる。しかし、石室の規模からみて、無袖式であることも充分考えられる。

石の積み方は、側壁側が石を横積みしているのに対し、奥壁側では3つの扁平な石を縦に使い、基底石上面を山形に作っている。奥壁の基底石の高さは、中央部で1.25m、側壁側で0.9m～1.0mを測る。

石室内の基本的層序 (挿図41)

石室内の埋土は大きく5層に分けられ、14層～19層から遺物が出土している。挿図41に示したのが石室内遺物出土状況の模式図である。ただし床面のレベルが一定でないので、遺物と土層の対応は厳密ではない。また第1次調査のトレンチから鉄地金銅張飾金具が出土したことから分かるように、遺物は大きく攪乱を受けていることも前置きしておく。



挿図38 2号墳地形測量図

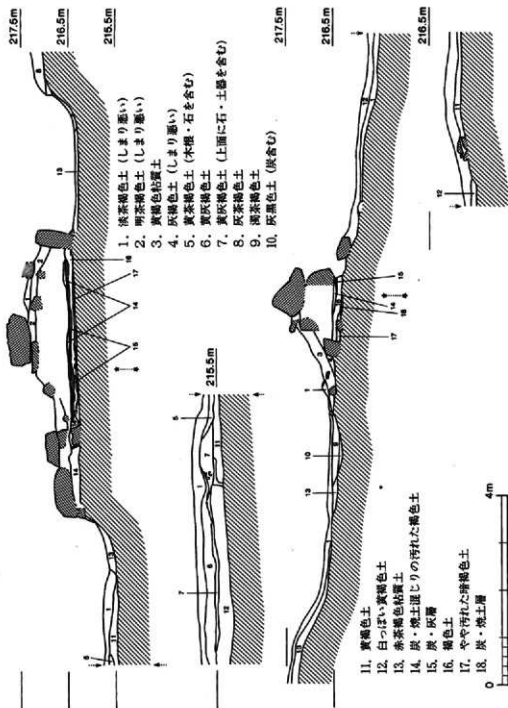


図39 2号墳横断面図

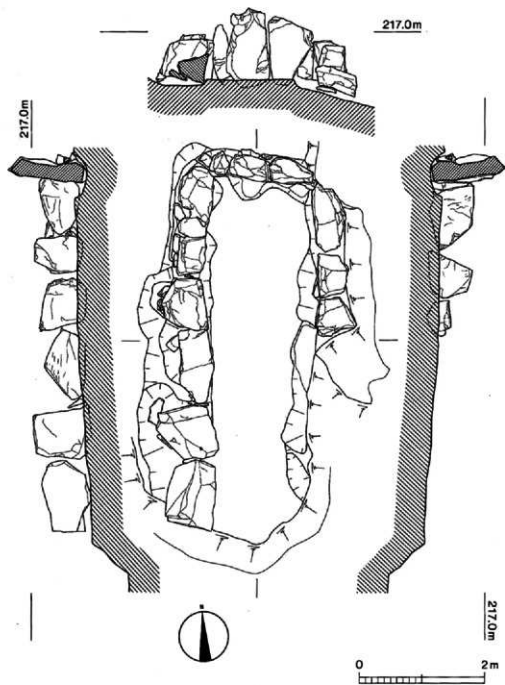


插图40 2号墳石室実測図

15層上面には火を焚いた跡らしい炭層が広がっており、炭層中から中世の須恵器・鉄器が出土した。16～18層からは奈良時代～平安時代の須恵器が出土しており、特に長頸壺(71)は炭骨器として埋納され、周りを石で囲まれていた。19層中からは古墳時代の須恵器・鉄器・玉類などが出土しており、後世の遺物は含まれていない。ただし床面のレベルは狭道部から奥壁に向かってやや高くなるため、奈良～平安時代の遺物とのレベル差はあまり感じられない。

以上のような状況から、この石室は奈良時代～中世にかけて頻りに再利用されたものとみられ、その際に古墳時代の遺物の一部はかなりの攪乱を受けたようである。これらの遺物は崩壊した石材の下から見つかっており、再利用時には開口はしていたものの、石室自体の崩壊はあまり進んでいなかったものと見受けられる。

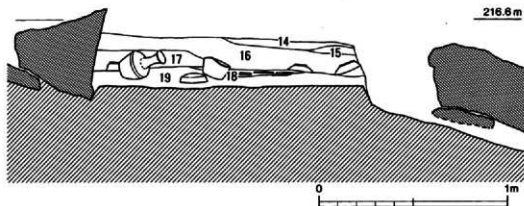
3. 古墳時代の遺物

遺物の出土状況(図版13・14、挿図42)

出土した遺物には須恵器・鉄器・玉類などがある。遺物の出土箇所は大きく次の4箇所にとめることができる。I) 奥壁付近、II) 東側壁の奥壁側、III) 西側壁の狭道部側、IV) 石室中央部。I) では須恵器の杯蓋や大刀・轡などの鉄器がかたまっており、追葬・再利用に伴う片付け行為と理解できる。II) では鞍(しおで)金具、III)・IV) では鉄地金銅張飾金具などといった馬具に付随する金具が出土し、本体が朽ちた後その辺りに散らばったものとみられる。IV) ではまた鉄釘・耳環や玉類も出土しており、木棺の存在を裏付けている。

須恵器(図版28、挿図43)

須恵器の個体数は非常に少なく、9点を図示したに止まる。しかし蓋に対応する身が出ていないことから、これは盗掘・攪乱などによって相当数が失われた結果といえる。器種には有蓋高杯の蓋・杯蓋・甕・四耳壺・提瓶などがある。



挿図41 2号墳石室内遺物出土状況模式図

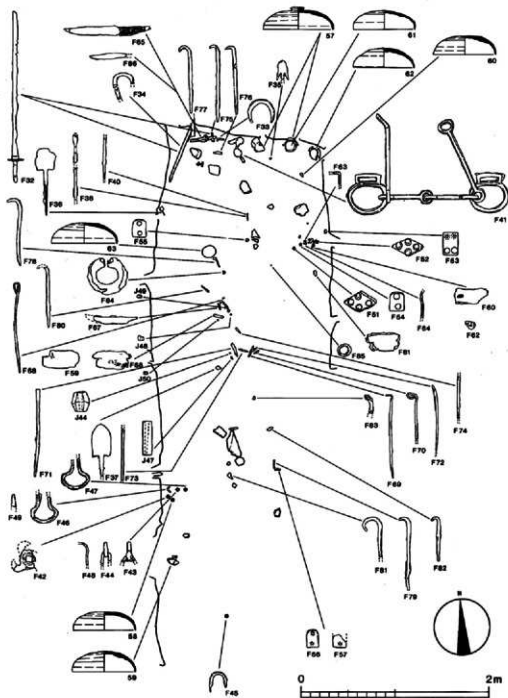
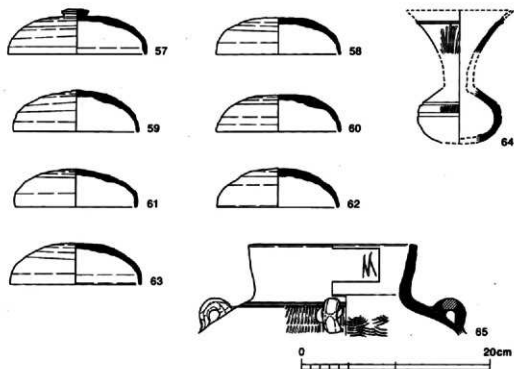


插图42 2号墳石室内副葬品出土状况图



挿図43 2号墳須恵器

57は有蓋高杯の蓋で、58～63は杯蓋である。外面は回転ヘラ削り、口縁部内外面は回転ナデで調整し、頂部内面に不整方向のナデを施す。57は口径14.8cm、器高4.7cm、58～63は口径12.8～13.8cm、器高3.9～4.4cmを測る。

64は甗で、口縁部・頸部を欠失しており直接には接合しないものの、大きさ・胎土などからみて同一個体と考えられる。口縁下に1条の段をめぐらし、口頸部にはタテ方向の沈線を縦に施す。胴部上半には2条の凹線をめぐらし、凹線間を木口状工具による刺突文で埋める。胴部最大径は9.0cmを測る。

65は胴部に環状の耳が付く大型の甗で、口縁部はやや開き気味に直立し、端部を平たく収める。口縁部外面には「M」字形のヘラ記号がある。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを施す。口径は16.8cmを測る。類例としては西紀町沢の浦古墳群の四耳甗¹⁾、春日町松ノ本古墳群の三耳甗²⁾があり、形態的な相似から本例は四耳甗と考える。

鏡象嵌大刀（図版28・31・32・38、挿図44・45）

奥壁の北西隅から出土した。大刀は二つに折れていたが、把元には銕・鉏（はばき）・黄金具を装着したままの状態であった。刀身はほとんど反りのない直刀で、平棟・平造りである。一部に鞘の痕跡と考えられる木質が付着していた。胴部は均等両開型式である。全長はおよそ91.4

cmに復元でき、その内刃渡りは77.2cmである。腐食が進んでいるため刃部の大半は失われているが、刃幅は2.7~3.2cm、棟幅は0.7cmを測る。

茎部は先端に向かって僅かに細くなり、茎尻は丸く収まる。茎部の長さは14.2cm、幅は基部で2.4cm、茎尻で1.7cm、厚みは0.4cmを測る。茎部には目釘が2箇所打たれ、その配置は縄元から1:2:1に割り振られていた。

刀装具には鈎・錐・黄金具・鞘金具がある。錆落しの際に銀線が見えたことからX線撮影を行ったところ、銀象嵌が施されていることが判明した。象嵌は出土時に表を向いていた方が残りが良い。刀装具としてはこの他にも把頭・鞘口金具・足金具・鞘尻金具などの存在が想定できるが、既に失われていたようである。

鈎(F32a)は倒卵形八窓のもので、中央に把木に差し込む孔があり、その周囲を台形の透窓が取り囲んでいる。錆で層状剝離を起こしているため、外縁の一部が欠落・膨張するものの、長径8.0cm、短径約6.5cm、厚み0.5cmに復元出来る。中央の孔はややいびつな倒卵形で、長径3.4cm、短径2.3cmを測る。象嵌文様は両面と側面に施されている。把側の面(A面)には外縁に沿って右回りの渦文、各窓と窓の間にS字状文が施されている。刀身側の面(B面)の文様もA面とほぼ同様であるが、内縁に沿って内向きの半円文を施し、前面を意識した文様構成となっている。側面には内向きの半円文を千鳥に対向させている。渦文1個の大きさは0.55~0.75cm、S字状文は0.95~1.15cmである。

錐(F32b)は筒状で、断面が不整な楕円形をなす。前面は閉じられ、茎を通す方形の孔が開けられている。後面は開放されたままである。長径3.6cm、短径2.35cmで、幅は1.6cmを測る。厚みは側面が3.0~4.0cm、前面が3.0cmである。象嵌文様は側面と前面に施されている。側面では逆向きの渦文を背中合わせにして蕨手状の文様を作り出している。文様は6単位残存しており、本来は全体で14単位あったとみられる。前面には側縁沿いに、二重の円弧で内向きの半円文を描いており、6単位で一周させている。

黄金具(F32c)は鈎を抑える役目をもつ鈎元黄金具で、倒卵形の環状を呈している。断面形はハの字形に鈎側に向かって開いており、その上面に銀象嵌を施している。大きさは鈎側が長径3.7cm、短径2.85cm、把頭側が長径3.55cm、短径2.6cm、厚みは0.35cmを測る。象嵌文様は外向きの半円文で、11単位残存しており、本来は20単位程で一周したものである。

鞘金具(F33・F34)は2点出土しており、いずれも断面方形の鉄棒を環状に曲げたものである。F33は馬蹄形を呈し、両端が薄くなっているが、象嵌の残り具合の観察から、これは鍛接部分で割れたために、約1/2を失ったものと考えられる。本来は楕円形あるいは倒卵形を呈する鞘金具だろう。断面形は不等辺四角形で、各辺は稜が研ぎ出されている。大きさは幅約4.2cm、厚み0.4cm×0.6cmを測る。側面には右回りの渦文が象嵌されているが、腐食が進んでいるために銀線は残っておらず、型痕のみが観察できる。渦文の大きさは0.3~0.5cmである。

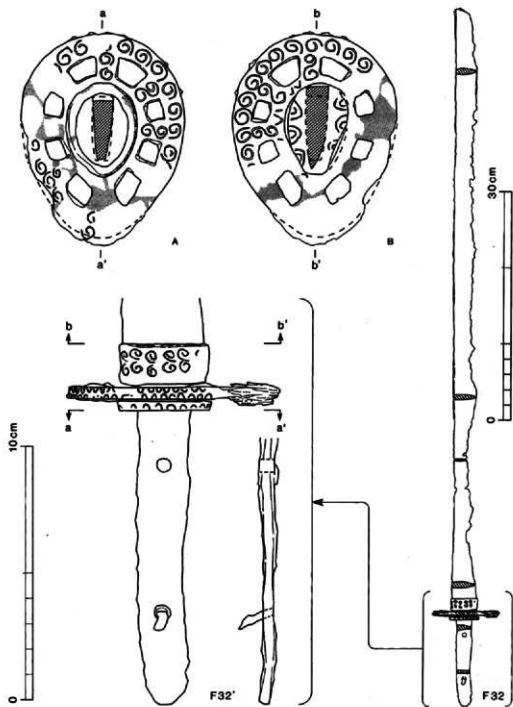
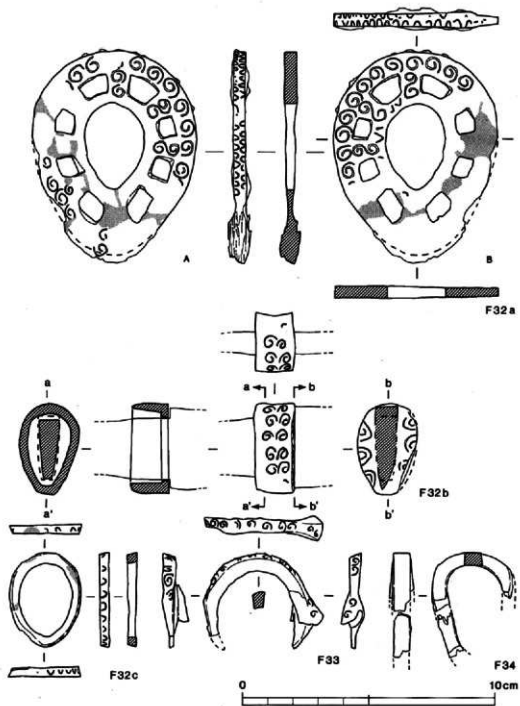


插图44 2号境铁器(I)



拆图45 2号铜缺器(2)

F34は約1/3を欠失し、残存部も大きく2片に分かれている。直接には接合しないが、倒卵形の刀装具となるものだろう。厚みは0.7cm×0.5cmを測る。全体を復元すると、長さ約4.5cm、最大幅約3.3cm程度の大きさになる。F34は厚みが大きい点からみて他の部品の可能性もあるが、とりあえず鞘金具としておく。

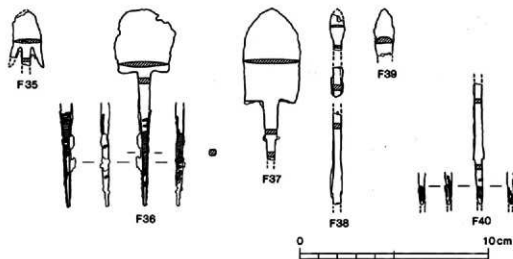
鉄 鏃 (図版33、挿図46)

鉄鏃は短頸鏃3点 (F35～F37) と、長頸鏃3点 (F38～F40) が出土した。

F35は鏃身部が柳葉形で、深い逆刺をもつ、腸袂(わたくり)柳葉形である。厚みは薄く、平造りである。頸部は断面が長方形で、その大半は失われている。鏃身部幅1.5cm、厚み0.2cmを測る。

F36・F37は鏃身部が頭の丸い五角形を呈し、浅い逆刺をもつ。厚みは薄く、平造りである。頸部は棒状突起による棘筈被を有し、断面が長方形となる。F36は切先が欠けているものの、茎部に糸を巻いた痕跡、茎部の先端を尖らしている点などがよく観察できる。この糸巻きは矢に装着した際の固定力を高めるためのものと考えられる。残存長10.4cm、鏃身部幅3.1cm、厚み0.3cm、頸部長2.0cm、幅0.65cm、厚み0.3cm、茎部長4.9cmを測る。F37は茎部の大半を欠失しており、残存長8.0cm、鏃身部長5.0cm、幅3.0cm、厚み0.25cm、頸部長2.0cm、幅0.65～0.9cm、厚み0.25cmを測る。

F38～F40は長頸鏃で、鏃身部が壺箭式のものである。F38は3片に分かれているが、同一個体である。鏃身部は小型で、両丸造りである。筈被は台形に作る。鏃身部幅0.75cm、厚み0.15cm、頸部幅0.4cm、厚み0.3cmを測る。F39は鏃身部のみの破片で、片丸造りである。鏃身部幅1.0cm、厚み0.35cmを測る。F40は頸部のみの破片で、台形の筈被がみられる。茎部には木質が付着している。残存長6.4cm、頸部幅0.4cm、厚み0.2cmを測る。



挿図46 2号墳鉄鏃(3)

馬具 (図版33・34、挿図47・48)

出土した馬具には轡(F41)、鞆金具(F42~F44、F46~F49)、鉄地金銅張飾金具(F50~F57)などがある。

轡(F41)は奥壁西北付近より出土した。非常に錆化が進んでいたが、錆落としの結果、銜(はみ)の一部を除いてほぼ完形に復元することができた。形式は環状鏡板付轡で、鏡板と引手を銜の外側の環に連結する引手・銜結合式である。

鏡板は左右一対で、円形の素環に長方形の立間が付き、立間の基部の段によって表裏が意識されている。素環部は6.1~6.4cm×4.6~4.8cmで、断面は径0.55~0.8cmの円形である。立間部は4.0cm×1.6cm、厚み0.35cmを測る。

銜は両端に環の付いた部品を2連結したもので、鏡板や引手に同じ角度で取りつくように、環の角度を90°変えるという工夫がなされている。1つの部品の長さは8.4cm、環は径2.2cm~2.5cm、断面は方形に近く、一辺0.7cmを測る。

引手は左右一対で、両端に環が付き、引手壺側の環は約45°外へ折り曲げられている。長さは13.8cm、断面は方形に近く、一辺0.7~0.8cm、銜側の環は径2.0cm×2.2cm、引手壺側の環は少し大きく径2.6cmを測る。

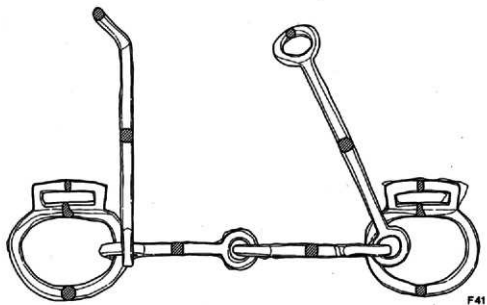
鞆金具(F42~F44・F46~F49)は西側壁の羨道部側から、部品が7点出土しており、座金具・輪金・足金具で構成される。

F42は鞆の座金具で、円形の座身の外側に鉤形の飾りをもつものになる。約1/3を欠失していて、鉤形の飾りは2単位分の痕跡しか残っておらず、本来何単位あったかは不明である。厚さ0.8mmの薄い鉄板を打ち出し、座身を円丘状に盛り上げ、中央には足金具を通す方形の孔がある。残存幅4.1cm、座身の径2.9cm、孔の幅0.8cm×0.9cm、高さ0.4cmを測り、鉤形の飾りを4単位に復原すると全幅5.4cm程度の逆L形の座金具となる。類例としてはS字形の座金具が京都府久美浜町湯舟坂2号墳³⁾・群馬県高崎市八幡観音塚古墳⁴⁾にみられる。

F43・F44・F46~F49は互いに直接に接合はしないものの、一対の鞆金具の鉤具の部品と考えられる。凸字形の輪金、足金具からなり、刺金(さすが)はみられなかった。F43・F44は輪金の基部と足金具の基部の断片で、足金具は1脚式である。F46・F47は輪金の環部で断面は円形である。環部の幅4.2~4.4cm、径0.4~0.5cmを測る。F48・F49は足金具の一部であろう。

F45は別の鉤具の基部の破片で、羨道部近くから出土した。断面形は矩形で、鍛接部で割られたらしく、両端は平たく延ばされている。幅2.8cm、径0.5cmを測る。

鉄地金銅張飾金具(F50~F57)は8点出土した。F51~F54は石室内の東側壁付近からF60~F64などと一緒にとまりをもって出土したものの、その他のF55は石室の中央部付近から、F56・F57は羨道部側から、さらにF50は確認調査の2号墳1Tから出土しており、かなり散らばった状況を呈している。



F41



F42



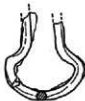
F43



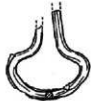
F44



F45



F46



F47



F48



F49



插图47 2号境铁器(4)

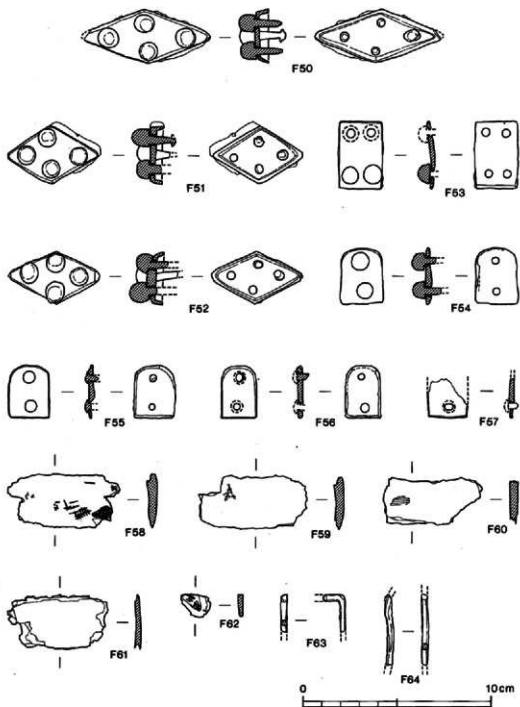


插图48 2号墳鉄器(5)

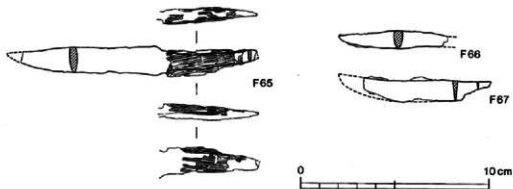
金具の類別は菱形〔A類〕のものが3点（F50～F52）、長方形〔B類〕が1点（F53）、爪形〔C類〕が4点（F54～F57）である。

A類は菱形の地板の側縁をスカート状に折り曲げ、7～9mmの高さをもたせている。地板の表面には金銅装を施し、四隅に打ち込んだ円頭紙の頭にも金銅装を施している。紙の先端を叩き潰した痕跡が一部にみられるため、装着していた革の厚みが5～6mmであったことが判る。F50はやや横長で、大きさが6.85cm×2.85cm、地板の高さが7mm、厚みが1～2mm、紙の長さが2.3cmである。やや小さめのF51・F52は、大きさが4.7～4.8cm×2.8～3.1cm、地板の高さが7～9mm、厚みが1～5mm、紙の長さが2.3cmである。

B類とC類は扁平な地板に金銅板を張ったもので、裏側に金銅板の折り込みが観察できる。B類のF53は長方形の地板の四隅に円頭紙を打ち込んだものであるが、うち2個の紙と紙の足部を欠いており、紙自体の長さが判るものはない。大きさは3.6cm×2.35cm、地板の厚みが2.5mmである。C類は爪形の地板に2個の紙を打ち込んだもので、紙が円頭紙のもの〔C1類〕（F54）と平頭紙のもの〔C2類〕（F55～F57）に分かれる。F54は紙の先端を失っているものの、大きさが2.95cm×2.3cm、地板の厚みが2.5mmを測る。F55～F57は紙に完全な形を留めるものがなく、またF57も地板の半分を欠いている。大きさは2.8cm×1.9～2.1cm、地板の厚みは1～3mmを測る。

以上の金具のうち、A類とB類は革帯に取り付けられた飾金具、C類は雲珠または辻金具の足金具であろう。

この他に、F58～F64のような部品が上記の金具の付近から出土しており、関連した製品の一部分と考えられるが、用途は判っていない。F58～F62は腐食のために層状の剝離が進行しているが、ほぼ一定の幅をもった鉄板の一部であることが判る。F58・F62には植物質の繊維が、F60には木質が付着しており、何らかの製品の枠組となった可能性も考えられる。F63・F64は断面が円形で、径3mmの細い鉄棒を曲げた破片であるが、やはり用途は不明である。



挿図49 2号墳鉄器(6)

刀 子 (図版33、挿図49)

刀子は3点あり、うちF65・F66は銀象嵌大刀の把部分に沿って出土しており、残りのF67は石室の中央付近から出土した。

F65は片開造りで、把部にはよく木質が遺存している。切先がなく、残存長12.55cm、茎部長5.0cmを測る。

F66は刀身の破片で、残存長5.8cmを測る。

F67は刀身から茎部にかけての破片で、片開造りである。残存長6.7cmを測る。

鉄 釘 (図版35、挿図50)

鉄釘は計16点あり、出土位置は奥壁付近と、石室の中央部に分かれる。形態は断面が矩形で細長いもの〔A類〕(F68～F74)と、断面が長方形で太短いもの〔B類〕(F75～F83)に分類することができる。

〔A類〕としたもののうち、頭部を薄く叩き延ばして折り曲げたものを〔A1類〕(F68～F70)とする。頭部の形状は、ほぼ直角のもの、約180°のもの、巻き込むようにしたものなどバリエーションが認められる。全長は12.8～13.9cm、幅は0.3～0.5cmを測る。〔A2類〕(F71)は頭部を折り曲げないもので、全長13.5cm、径0.4cmを測る。F72は一見〔A2類〕に見えるが、これは打ち込む際に頭部を失ったものとみられる。

〔B類〕はすべて頭部を短く屈曲させたものである。F81は打ち込まれた時に頭部が大きく弯曲したものである。全長はF75～F79が10.4～11.85cm、F82のみ小型品で全長6.9cmを測る。幅は一様に0.4～0.5cm×0.6～0.8cmを測る。

耳環・玉類 (巻首図版4、挿図51)

耳環や玉類は、石室内のほぼ中央部付近で、南北方向の広がりをもって出土した。

耳環(F84)は1点のみ検出した。金銅製で、長径3.0cm、短径2.8cm、断面径0.8cmを測り、現状での重さは19.68gである。箔の一部が剝がれ落ちているために、芯の銅環が剥き出しになって緑青をふいている。残った金箔の部分は鈍く銀色に光っているが、内側には当初の金色を伝える部分もある。耳挟み部端面の箔も剝がれていたため、その裏面(図中に示す)を見ると、鍍金を終えた時にできたと思われる絞ったような皺が観察できた。

この他、小型の銅環1点(F85)が出土している。断面が円形の銅棒を曲げて作ったもので、径1.0cm×1.05cm、断面径0.2cmを測る。かなり腐食が進行しており、現状での重さは0.28gである。これが何の部品であったかについては不明である。

玉類には切子玉(J44)、管玉(J45～J47)、ガラス小玉(J48～J62)がある。

切子玉(J44)は半透明の水晶製で、やや風化が進んでいる。側面の12面はきれいにカットされているが、一方の端面は敲打痕がみられる。孔は片面穿孔による。軸長1.65cm、最大径1.45cm、両端径0.8～0.9cm、孔径0.15～0.4cmを測り、重さは3.85gである。

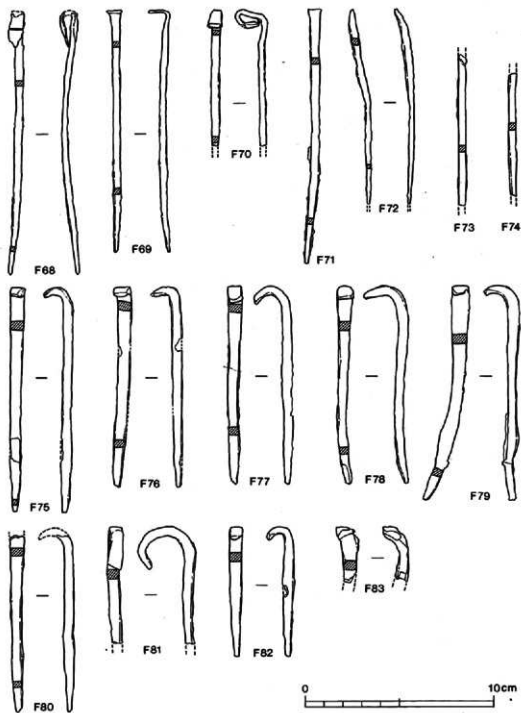
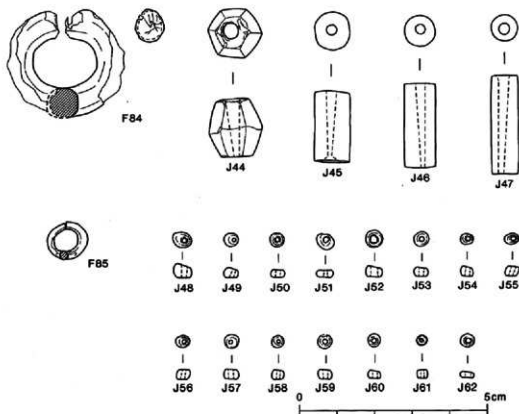


插图50 2号墳鉄器(7)



挿図51 2号墳耳環・玉類

管玉（J45～J47）は濃緑色の碧玉製で、3点出土した。いずれも片面穿孔だが、J45のみ対面に撚鉢状の調整を施している。J45は軸長1.9cm、径0.95cm、孔径0.1～0.3cm、現状での重さ3.18g、J46は軸長2.25cm、径0.85cm、孔径0.1～0.25cm、重さ3.02g、J47は軸長2.65cm、径0.75cm、孔径0.15～0.3cm、重さ2.35gを測る。

ガラス小玉（J48～J62）は全部で20点出土したが、そのうち調査時に出土したのは3点のみで、ほとんどが水洗選別によって採集したものである。あまり風化は進んでおらず、破砕した5点を除く15点を図示した。形がいびつで、上・下面が平行にならず、角が曲線的になるものが多い。しかし孔の断面形は直線的である。軸長1.6～3.45mm、径2.85～4.9mm、孔径0.55～1.7mm、重さ0.03～0.09gを測る。なお1点ごとの計測値については表3に掲げた。色調は青系統と黄系統のものがあり、青系統はさらに4種類の色階をもつ。透明度は淡い青が最も高く、コバルトが低い。黄はほとんど不透明である。

4. 再利用時の遺物

遺物の出土状況 (図版12、挿図52)

出土した遺物には須恵器・土師器・鉄器があり、このうち土師器は細片のため図示しなかった。遺物の出土箇所は、石室の北西側から奥壁付近で希薄な傾向があり、その辺りは石室の崩壊がいち早かった可能性がある。石室の再利用は奈良時代～中世にわたっており、奈良時代～平安時代の遺物は主に16層～18層から、中世の遺物は15層以上から出土した。

奈良時代～平安時代の須恵器は完形、あるいは本来完形であったと考えられる状況で出土したものが多く。例えば長頸壺(72)は炭骨器として埋納されたもので、破損した壺の周辺には多数の骨片が散らばっていた。また蓋杯(66～70)や碗(73・74)も完形で出土しており、石室自体が墓地や信仰の対象になっていたことが窺える。特に68の杯の上に66・67の蓋が裏返しに重ねられた状態は、一括の供献形態を示すものであろう。

一方、中世の須恵器の碗のうち78・79は、わざと破砕された上、紡錘車(F86)などと一緒焚き火に投げ込まれていた。これもまた何らかの祭祀に伴う行為と考えられる。

須恵器 (図版29・30、挿図53・54)

奈良時代の須恵器には杯蓋・杯身・長頸壺がある。

杯蓋(66・67)は、口縁部内面に退化したカエリがつき、頂部にはツマミがつく。外面は回転ヘラ削り、内面および口縁部内外面は回転ナデで調整する。口径15.1～15.4cm、器高2.9～3.1cmを測る。

杯身は、体部が上外方へ直線的に延びるもの(68・70)と、わずかに外反するもの(69)がある。高台は輪高台で、踏ん張り強い。内外面とも回転ナデで調整する。口径13.6～14.0cm、底径9.3～9.7cm、器高3.5～3.9cmを測る。

長頸壺のうち71は口縁部が外反し、肩部に稜をもち、胴部は直線的にすばまる。底部は平底で、高台をもたない。肩部に1条の凹線をめぐらす。調整は内外面とも回転ナデで、底部側面のみ回転ヘラ削りを1段施す。口径10.4cm、肩部径16.0cm、底径11.5cm、器高18.7cmを測る。72は口縁部が直線的に広がり、肩部から胴部にかけて丸みをもつ。肩部には2条の凹線を施す。底部は平底で、高台をもたない。調整は内外面とも回転ナデで、底部側面のみ回転ヘラ削りを2～3段施す。口径9.9cm、胴部最大径17.3cm、底径8.5cm、器高23.3cmを測る。

平安時代の須恵器には碗・小型の碗・羽釜がある。

碗(73・74)は、平高台から直線的に開く体部をもつ。高台の角は不調整で、見込みの段は浅い。内外面とも回転ナデで調整し、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法で行う。73は口径13.0cm、底径7.9cm、器高4.5cm、74は口径13.5cm、底径7.5cm、器高4.6cmを測る。

小型の碗(75・76)は、平高台から体部が内湾気味に立ち上がる。調整は内外面とも回転ナデで、底部は回転糸切り技法で切り離す。75は高台が高く、見込みが深い。口径9.1cm、底径3.9

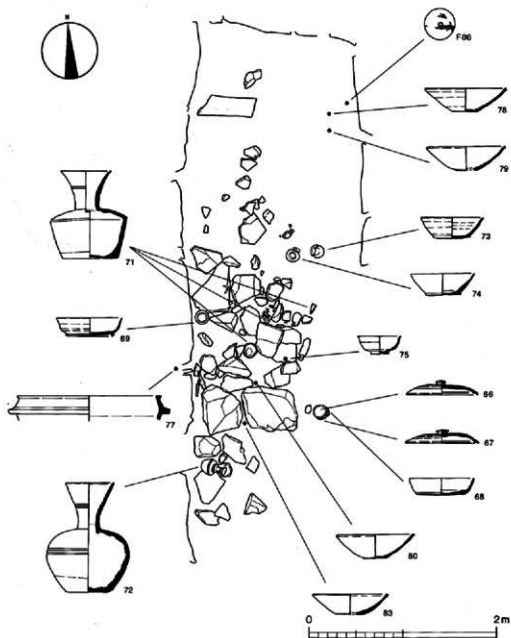
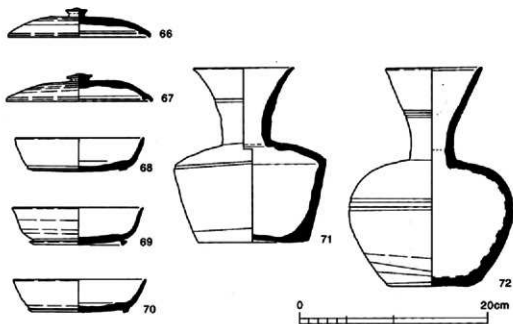


插图52 2号墳石室再利用遺物出土状況図



挿図53 2号墳石室再利用 土器(1)

cm、器高3.7cmを測る。76は高台がほとんど作り出されず、見込みの段も浅い。口径8.8cm、底径3.7cm、器高3.0cmを測る。

羽釜(77)は口縁部の約1/8のみが出土した。色調は橙褐色を呈するが、焼き上がりは堅緻で、須恵器窯で焼かれたものと考えられる。口縁部は内傾気味で、端部を水平につまみ出す。胴部は厚手で、上面を下がり気味に、下面を水平にする。口径28.4cm、胴径33.9cmを測る。

中世の須恵器は碗(78~84)のみである。調整は内外面とも回転ナデで、底部は回転糸切り技法で切り離す。78~81は5.0~5.4cm程度の小さめの底部から、直線的な体部が上外方に延びる。底部と体部の境は明瞭で、見込みに浅い段をもつ。口径16.2~17.0cm、器高4.9~5.3cmを測る。83はほぼ同様の器形を示すが、底径がやや大きく、体部との境が不明瞭となり、器高が低い。口径15.6cm、底径5.6cm、器高4.3cmを測る。84は口径・底径とも一回り大きく、見込みは平坦である。口径17.6cm、底径6.9cm、器高5.2cmを測る。82は体部が内湾気味に立ち上がり、端部を外方につまみ出す。口径15.5cm、底径6.3cm、器高4.9cmを測る。

白磁(図版30、挿図54)

85は白磁の碗の底部の破片で、輪高台をもつ。底部は1.4cmの厚みをもち、内面を輪状に掻き取り、見込みに釉薬を残す。底径は7.2cmを測る。所属年代は78~84の土器に併行するものである。

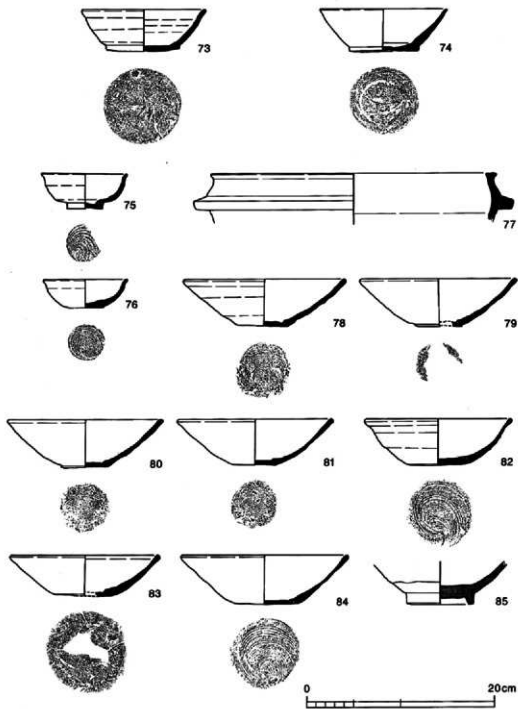
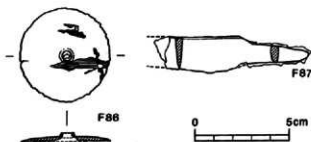


插图54 2号墳石室再利用 土器(2)



挿図55 2号墳石室再利用 鉄器

鉄器 (図版35、挿図55)

鉄器には紡錘車・刀子があり、78・83などの椀とともに炭層中から出土した。

紡錘車 (F86) は直径4.7~5.0 cm、厚み0.2cmの円盤状を呈する。断面形は平たい薄餅状で、中心の孔は平坦面側から凸面側に穿たれ

ている。凸面側にはスサ状の繊維が付着していた。

刀子 (F87) は切先を失っており、茎から刀身にかけての残欠である。茎は基部で幅1.0cm、厚み0.5cmを測るが、先細りとなる。関部は不明瞭ながらも両関で、刀身の幅1.7cm、棟幅0.4cmを測る。

5. 小結

2号墳は1号墳以上に遺存状況が悪かったが、墳形・石室の形態についてある程度の推定を行った。その結果、墳形は円墳で、東西9m、南北10m程度の規模をもち、右片袖式か無袖式の横穴式石室を主体部とすると考えられた。

副葬品の内容は1号墳と対照的で、土器が少なく、鉄器が豊富に出土した。しかしこれは須恵器の杯蓋があつて、杯身のないことから分かるように、大部分が失われた結果であつて、本来の状態ではない。玉類は点数こそ少なかったものの、切子玉・管玉・ガラス小玉のバリエーションが見られた。

副葬品の中で注目すべきは銀象嵌大刀で、この遺物については後章で詳述する。その他、馬具の中にも鉄地金銅張飾金具、鉤形の飾りがついた鞍金具など見るべきものがあった。馬具は轡・鞍・雲珠もしくは辻金具がセットで出土したが、環状鏡板付轡と伴出することの多い木芯鉄張査造は認められなかった⁽⁵⁾。

古墳の年代は、須恵器が少ないため決め手に乏しいが、1号墳の資料とも比較してみると、だいたいTK-43型式の中に入るものようである。従つて古墳の年代は6世紀後葉に比定できる。

註 (1) 兵庫県教育委員会『沢の浦古墳群』1987年

(2) 兵庫県教育委員会『松ノ本古墳群』1985年

(3) 久美浜町教育委員会『湯舟板2号墳』1983年

(4) 名古屋市博物館『特別展古墳時代の馬具』1985年

(5) 荒川史「環状鏡板付轡の問題点」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 1987年

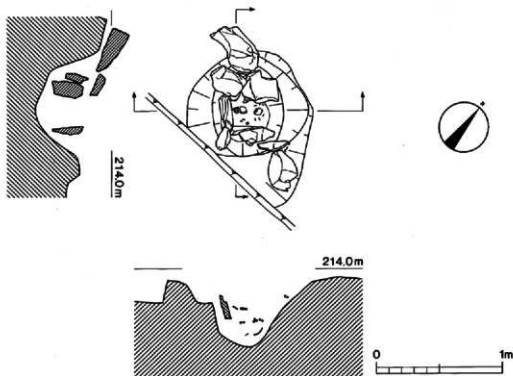
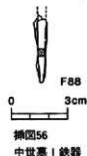
第7節 その他の遺構の調査

確認調査の際、1号墳の北西の墳丘外2トレンチで、近世陶器が発見され、2号墳北東の墳丘外3トレンチで集石と近世陶器が発見されたので、古墳2基以外にも近世の遺構の所在が予想された。そのため墳丘以外の調査をおこなった結果、墳丘外2トレンチ付近で中世墓4基が確認され、集石状遺構のひろがりも確認された。

また、石器も発見され、確認のためグリッドを設定して調査を行った。

中世墓1（図版16・37、挿図56）

中世墓1は、まず最初に墳丘外2トレンチの断面にかかっていた遺構である。しかし、黒色土の広がりの中に骨片が散っているだけで、土壌のような明確な遺構は検出されなかった。遺物は釘らしい鉄片（F88）が出土している。なお、付近を清掃中に銭が出土している。



挿図57 中世墓2 実測図

中世墓 2 (図版17・36、挿図57)

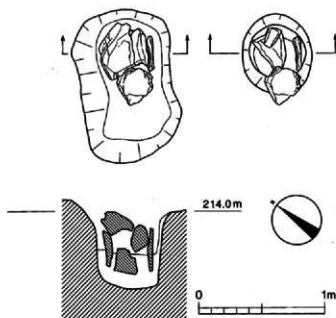
中世墓 2 は墳丘外 2 トレンチの北で検出された。1~1.3mの長円形の掘り方内の一方よりに、角張った自然石を四角く組んで0.5m×0.5mの石組みを作っている。蓋石はなかった。石の検出面から約0.8mの深さから骨片、丹波焼の匣鉢(さや)の破片(99)、土師器小皿(94)そして銭が出土している。銭はブロンズ病による風化が著しく、青緑白色化してばらばらになり、附着していた木質が残っているだけであった。なお、丹波焼の匣鉢の破片は調査区外の破片と接合した。この匣鉢の時期と、土師器小皿の時期にはかなりの隔たりがあるので、前者は後世の混入と考える。

中世墓 3 (図版18、挿図58)

0.8~1.2m程度の長円形の掘り方の一方寄りに蓋石があり、その下に自然石を0.5m×0.7mの箱型に組んでいる。深さは石の検出面から約0.6mである。遺物はなにも出土していない。

中世墓 4 (図版18・36、挿図59)

2.1~1.7mの長円形の掘り方内に石組みがあった。深さは0.9mで地山を掘りこんでおり石はその底面よりかなり高い位置にあり、どちらかといえば蓋石の性格がつよいものか。4基の中世墓群の中では最も大きいものである。骨片が散り、底面付近に土師器の皿・小皿が4枚(90~93)置かれていた。



挿図58 中世墓 3 実測図

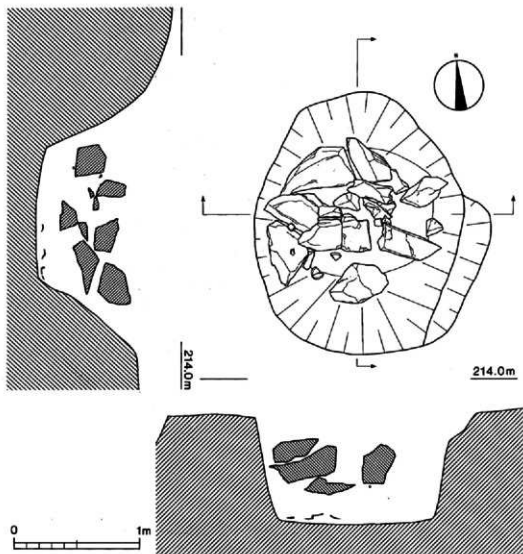
集石遺構 (図版16・37、挿図60)

墳丘外 3 トレンチで集石の広がりが出され、近世の墓地などの遺構を想定して、石敷の範囲を確認した。この集石遺構の石を除いたところ、浅い溝状の掘り込みがあったが、顕著な遺構はみとめられなかった。遺物は須恵器碗の糸切底の破片(95)が1点石の上にあっただけである。

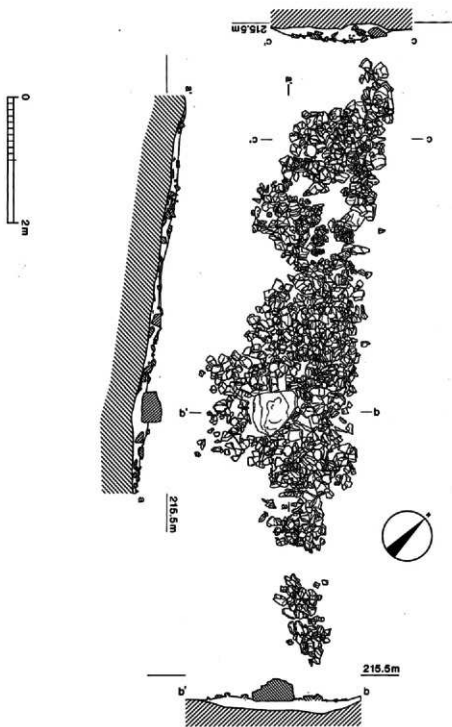
その他の中・近世の遺物（図版36・37、挿図61）

1号墳の南西にあたる現代までの山道のバラス層から、96の丹波焼の壺が出土している。

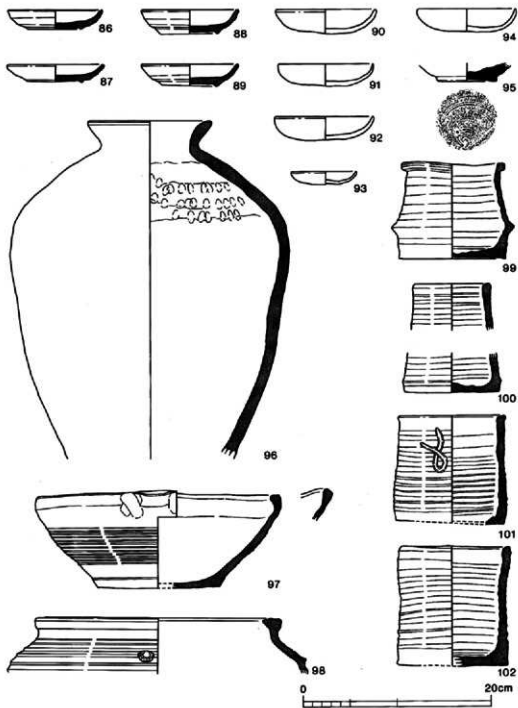
また、調査区の北に作業用のコンテナハウスが設置していたが、これを撤去する際に数点の近世陶器が出土した。丹波焼の鉢(97)、匣鉢(100~102)である。特に匣鉢内には骨片が入っており、蔵骨器として用いられたようだ。地元の伝承では、この付近に墓地があったらしい。



挿図59 中世墓4 実測図



挿図60 集石遺構実測図



押図61 土器

古墳築造以前の遺物 (図版37、挿図62)

これに属する石器として石鏃1点、楔形石器1点、使用痕有剥片1点の計3点である。以下各遺物について概述する。

石鏃 (S2)

サヌカイトを素材とする。基部は凹基無茎で、両面の全体に細かい調整加工が施される。長さ1.5cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gを測る。

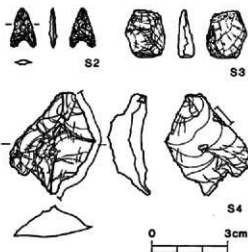
楔形石器 (S3)

石鏃と類似した石質のサヌカイトを素材とする。上下縁の階段状剥離の形成は明瞭でない。一部に礫表を残す。長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ1.4gを測る。

使用痕有剥片 (S4)

赤褐色の鉄石英を素材とする。背面は本剥離以前の剥離面のみによって構成され、腹面は主要剥離面である。両側縁の一部に使用痕と考えられる微細剥離痕が観察される。長さ4.0cm、幅3.1cm、厚さ2.4cm、重さ12.5gを測る。

以上の石器のうち、2号墳北西グリッドから出土したS2は、ほぼ確実に縄文時代の所産と考えられる。S4は現位置を遊離しているが、S2と近接した位置から出土しており、また、離れて1号墳から出土したS3も同時期と判断してほぼ差し支えないものと思われる。S4は、その石材が本遺跡の南東約4kmに所在する溝口遺跡で出土した先土器時代の石器に多用される石材と同一であることが調査時から注意され、同時代に遡る可能性も残るが、単独出土であることと他の石器が縄文時代のものと考えられることから、本石器も後者に属するものと捉えておきたい。



挿図62 石器

第8節 小結

昭和61年真冬、三田市の虚空蔵山麓において実施した高川古墳群1・2号墳の発掘調査は次のような成果があった。Ⅰ) 縄文時代の石器の発見 Ⅱ) 古墳時代後期2基の円墳の調査と象嵌大刀他優れた遺物の発見 Ⅲ) 円墳の横穴式石室を再利用した状況の調査(a. 奈良時代 b. 平安時代 c. 鎌倉時代 d. 江戸時代) Ⅳ) 平安時代の集石遺構の調査 Ⅴ) 中世(室町時代)・江戸時代の墓の調査である。

Ⅰ) 相野川流域の溝口遺跡で先土器時代石器群の調査以来の発見であり、虚空蔵山麓を狩猟場としていた縄文人の生活が偲ばれる。三田市内では相野川流域の内神遺跡、青野川流域の青野ダム内遺跡群、羽束川流域の下瀬遺跡など縄文時代早期・後期の遺跡が知られている。

Ⅱ) 相野川流域の上流右岸では他に古墳はみられない。摂津の北西隅、丹波との国境日出版峠への道筋を望む地にあり、3基の円墳で構成される古墳群の内、2基の調査であった。径10・11m程度の長円形の古墳で右片袖または無袖の横穴式石室を内部主体とする。石室の規模は古墳が後世に壊された為に完全に復原する事ができないが、1号墳では玄室(奥壁幅1.5m・長5.0m)・羨道(幅1.1m・長2.4m)、2号墳では玄室(奥壁幅1.6m・長3.5m)・羨道(幅1.0m・長2.2m)がそれぞれ復原される。遺物の多くは動かされており、出土状況も原位置を保っていないが概ね玄室奥壁右・左隅・中央、左側壁に偏る。遺物は須恵器・装飾大刀をはじめとする鉄器・玉類・耳環等が出土している。耳環の数等から複数埋葬が考えられる。須恵器・装飾大刀等の存在から古墳群の形成及び、造墓とその被葬者について次章で若干の考察をする。

Ⅲ) 酒垂神社から虚空蔵寺への参道筋にあり、そして峠越えで古丹波の故郷立杭に至る位置にあたり、墓や祠・休み場などとして利用されている。出土須恵器は三田市の末・相野などの各窯跡の製品がみられる。

Ⅳ)・Ⅴ) 遺跡をとりまく状況はⅢ) 同様の状況を示しており、特に室町時代においては丹波焼壺、瀬戸・美濃焼灰軸皿・土師器皿等が蔵骨器や副葬品として使用されている。

以上、遺存状況の悪かった小円墳から多くの歴史資料が抽出できた。特に装飾大刀については三田盆地の西山古墳出土の金銅冠等と異なった性格が考えられる遺物で、今後の三田市の資料の増加に期待する。

第4章 ま と め

第1節 古墳時代の須恵器

古墳時代の土器は主に須恵器である。須恵器の年代観について陶邑編年を援用すれば、1号墳は6世紀中頃から7世紀初頭、2号墳は6世紀後葉となろう。ただし、この時期については地方窯ごとの特色も出てくる時期であり、細かな年代観については三田盆地独自の編年による必要がある。しかし、当時期についての三田盆地における須恵器の編年については未だ確立していない。ここでは、それよりも須恵器の産地に関する問題点を取り上げたい。

高川古墳群付近で、この時期の須恵器の窯として考えられるのは、北摂三田ニュータウン中央地区の平方窯跡群であり、やや新しい時期には東山窯がある。青野の末古窯跡群内ではまだこの時期の窯跡は調査されていないが、青野地域の古墳からはこの地域で焼かれたと思われる須恵器群が出土しており、この時期にも須恵器の生産が行われていたことは確実である。

今回は胎土分析による自然科学的な検証はできなかったが、同じ三田地域内の同じような時期の須恵器でも末古窯跡群と平方窯跡群の製品は、胎土・形態や調整技法によってかなり明確に区別することが可能である。その検討から高川古墳群では、少なくとも平方窯跡群と末古窯跡群の両者の製品が用いられていると判断できる。両窯跡群と高川古墳群との距離は大差ない。

一つの古墳に近隣の複数の窯跡群からの製品が納められているという事実は、ある地域内に所在する複数の窯跡群が、それぞれに排他的な消費圏をもつのではなく、より複雑な生産地と消費集団の関係が存在することを示している。

このことは、古墳に副葬するために意図的に複数の産地から須恵器を求めるとか、または日常生活の場である集落においても複数の産地から須恵器の供給を受けており、そうした状況が古墳にも反映されているのかといった問題を提起する。いずれにせよ一つの古墳内に産地の異なる須恵器が共存することは今後十分にその意味を検討してゆく必要がある。

これまで問題とされてきたのは、在地の須恵器と中央つまり陶邑産の須恵器の共存という現象であって、在地の複数の産地の製品の共存はあまり問題とされてこなかった。地方における窯跡群の細かい分析が進むにつれてこうした例もふえてくると思われる。今後の課題として、中央と比較しての須恵器編年の時間的な枠組だけでなく、窯跡群間あるいは個々の窯ごとの胎土・製作技法の差異なども是非とも考慮していくべきである。また、生産地としての窯跡群の分析と、消費地としての古墳群や集落の分析を総合することも必要であろう。

第2節 古代～中世の須恵器

高川1・2号墳からは、後世の石室再利用に伴う土器や鉄器が出土しており、再利用が奈良時代～江戸時代にわたったことを物語っている。ただしその石室再利用は断続的なもので、須恵器からはI期～VI期に分けることができる。

I期の器種には杯蓋(66・67)、杯(68～70)がある。杯蓋は内面にカエリをもつが、消失直前のものである。杯は体部の立ち上がりやや丸みを帯びているものの、高台部は踏ん張りが強い。以上の特徴を平城宮土器編年に照らすと、平城宮土器Iに相当し、7世紀末～8世紀初頭の年代が与えられる。

II期の器種には杯(42・43)、長頸壺(71・72)がある。杯は輪高台をもち、体部が上外方に開くもので、法量に大小の差異が見られる。長頸壺は直線的な体部から肩が張り、口縁部が外反するタイプ(71)と、体部が丸みを帯びて肩が張らず、口縁部が内湾気味に開くもの(72)がある。いずれも底部に高台は付かない。以上の土器は三田市末古窯跡群の地福1～3号窯¹⁾に類例が求められ、おおよそ8世紀後半の年代が与えられる。なお、2号墳の古墳時代の遺物の中で述べた四耳壺(65)は、この期まで下る可能性がある。

III期の器種としては碗(73・74)、羽釜(77)がある。碗は平高台から上外方へ体部が開くもので、底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法による。羽釜は短く内傾する口縁部に厚手の鋳部が付く。碗は相野古窯跡群中の古城窯跡の製品に近く、羽釜も同古窯跡群での生産が知られている。以上から、10世紀中頃を中心とした年代が考えられる。

IV期の器種には小型の碗(75・76)が見られるだけである。いずれも平高台から体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。高台が高く、見込みの凹みが強い75がやや古く、高台がほとんど消失し、見込みがあまり凹まない76が新しい様相を示している。他地域との比較により、11世紀代のもと考えられる。

V期の器種は小皿(54)と碗(47・78～81・83)がある。小皿はロクロ成形、回転糸切り技法を用いたものである。碗は底径が小さく、体部が上外方へ直線的に開く。もはや高台はなく、見込みはわずかに凹みだけである。底部の切り離しは回転糸切り技法による。これらの土器は東播系須恵器の編年から、13世紀初頭に比定できる。

VI期の器種は碗(44～46・82・84)のみである。底径は再び大きくなる傾向を見せ、立ち上がりの峻は甘くなる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。三田盆地における当該期の窯跡は、末古窯跡群の井ノ方窯跡²⁾、三田市見比窯跡³⁾があり、13世紀前半の年代が与えられる。

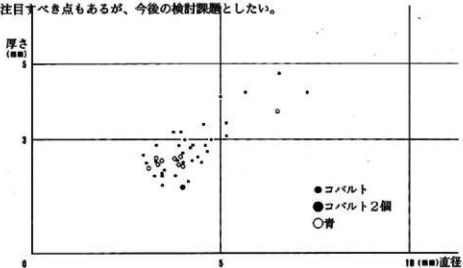
註 1) 兵庫県教育委員会「地福窯跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』1988年

2) 兵庫県教育委員会「井ノ方窯跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』1988年

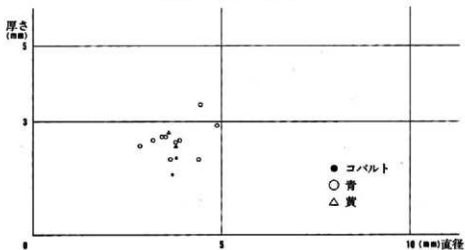
3) 島中剛「見比窯跡採集の須恵器について」『三田考古』第13号 三田市教育委員会 1984年

第3節 玉 類

1号墳から出土した玉は主にコバルトブルーのガラス玉であるが、2号墳のガラス玉は淡い青を主体にコバルトブルーと黄色が混じり、他にも碧玉の管玉と水晶の切子玉があって、バリエーションに富む。玉の法量をみると、1号墳にはやや大きめの玉が含まれていることがわかる。1・2号墳とも、出土している玉だけでは首飾りや腕飾りには少ないので、他に失われた玉もあったと思われる。水晶の切子玉の穿孔方法や、ガラス玉の色と製作技法の関連などいくつか注目すべき点もあるが、今後の検討課題としたい。



挿図63 1号墳ガラス玉法量



挿図64 2号墳ガラス玉法量

ガラス玉（上段：1号墳、下段：2号墳）

No.	色調	直径	厚さ	孔径	重量	No.	色調	直径	厚さ	孔径	重量
J1	コバルト	4.25	2.85	1.1	0.07	J23	コバルト	3.95	3.2	1.0	0.06
J2	青緑	3.95	2.55	1.1	0.04	J24	コバルト	3.3	2.45	0.85	0.04
J3	コバルト	4.5	2.4	1.15	0.07	J25	コバルト	3.77	3.2	0.95	0.07
J4	コバルト	4.15	1.9	1.35	0.04	J26	コバルト	3.45	1.8	0.9	0.30
J5	藍	3.8	2.5	1.1	0.05	J27	コバルト	4.65	2.7	1.4	0.08
J6	コバルト	3.3	2.85	1.25	0.05	J28	コバルト	4.0	1.75	1.25	0.04
J7	コバルト	3.8	2.05	1.25	0.04	J29	淡い青	3.92	2.35	0.85	0.05
J8	淡い青	4.0	2.3	1.25	0.05	J30	コバルト	4.25	2.45	1.55	0.06
J9	コバルト	4.75	3.0	1.25	0.10	J31	コバルト	3.85	2.45	0.9	0.05
J10	コバルト	5.15	3.1	1.35	0.13	J32	コバルト	3.47	2.1	0.85	0.04
J11	コバルト	3.45	2.05	0.85	0.04	J33	コバルト	3.9	2.85	0.9	0.05
J12	コバルト	5.0	4.15	1.6	0.17	J34	コバルト	4.05	3.0	0.65	0.07
J13	コバルト	4.4	2.55	1.15	0.07	J35	コバルト	3.25	2.05	0.85	0.03
J14	コバルト	4.2	2.8	1.15	0.07	J36	淡い青	3.1	2.25	0.85	0.03
J15	コバルト	4.6	2.85	1.5	0.09	J37	コバルト	3.5	2.2	0.9	0.04
J16	藍	3.35	2.35	0.7	0.04	J38	コバルト	2.95	2.6	1.0	0.02
J17	藍	3.32	2.5	0.85	0.04	J39	コバルト	4.0	2.4	0.8	0.06
J18	藍	3.45	2.45	0.95	0.03	J40	コバルト	5.65	4.25	1.1	0.20
J19	コバルト	4.0	2.65	1.4	0.06	J41	藍	6.5	3.75	1.35	0.23
J20	コバルト	4.55	3.4	1.05	0.09	J42	コバルト	6.55	4.75	1.5	0.30
J21	コバルト	4.0	1.75	1.3	0.04	J43	コバルト	7.3	4.25	1.75	0.32
J22	コバルト	5.15	3.45	1.35	0.13						
J48	淡い青	4.45	3.45	1.1	0.09	J56	淡い青	3.47	2.6	0.9	0.05
J49	コバルト	3.8	2.35	0.9	0.05	J57	淡い青緑	3.8	2.45	1.0	0.06
J50	コバルト	3.85	2.05	1.1	0.04	J58	黄	3.6	2.7	0.55	0.04
J51	淡い青	4.4	2.0	1.2	0.05	J59	淡い青	3.9	2.5	1.2	0.04
J52	水色	4.9	2.9	1.7	0.08	J60	淡い青	3.65	2.0	1.15	0.04
J53	黄	3.8	2.35	1.15	0.04	J61	淡い青	2.85	2.35	0.8	0.03
J54	淡い青	3.5	2.6	0.95	0.05	J62	コバルト	3.7	1.6	1.3	0.03
J55	淡い青	3.2	2.5	0.75	0.04						

その他の玉類

No.	種類	直径	長さ	孔径	重量
J44	水晶切子玉	13.1	15.6	3.65~1.75	3.85
J45	碧玉管玉	9.65	18.45	2.3~0.95	3.17
J46	碧玉管玉	8.5	22.2	2.3~0.85	3.01
J47	碧玉管玉	7.05	25.75	2.6~1.75	2.35

表3 玉類計測表

第4節 裝飾大刀

高川古墳群では1号墳から金銅製の鐔が、2号墳から銀象嵌大刀が出土した。いずれも把頭を欠失しているため、大刀の形式は不明であるが、類例からおおよその推定ができる。

1号墳出土の鐔は、金銅製六窓で、縁金をもたない造りである。県下における金銅製有窓鐔の類例は、高畑2号墳（六窓）、長尾古墳（六窓）、上山5号墳（八窓）、二見谷4号墳（六窓）、文堂古墳（六窓）にみられ、このうち大刀形式の判っている2例は頭椎大刀である。全国の例を見てみると、この種の鐔は頭椎大刀の他、円頭大刀・圭頭大刀に使用されることが知られている。ただし円頭大刀での使用は例外的なもので、1号墳出土の金銅製鐔は頭椎大刀もしくは圭頭大刀に用いられたものであろう。

一方、鉄地銀象嵌大刀は県下で8例あるが、そのうち高川2号墳と同様に鐔・鍔などの刀装具に象嵌が残っており比較対照できる資料が、近舞線の一連の調査によって得られている。挿図65は鐔と鍔を組み合わせて（3は鐔のみ）、文様を模式的に復原した図で、とりわけ2の沢の浦2号墳出土大刀の刀装具¹³に施された象嵌文様は高川2号墳のそれと酷似している。1と2を詳細に検討してみると、2の鐔は渦文の向きが表裏で逆になる¹⁴、S字状文・半円文がなく、側縁には二重弧文を施す、鍔の側縁の文様は同方向の渦文となるといった違いを挙げる事ができる。しかしそのような細部における差異以上に、渦文を中心とした文様構成、鍔前面の二重弧文、ほぼ同型同大の刀身を見るならば（図版31参照）、両者は刀身から刀装具まで一貫して同じ工程を経て造られた兄弟刀といえる。沢の浦2号墳例は把頭自体は残っていなかったものの、把頭縁金具の存在から頭椎大刀であったことは確実である。従って、高川2号墳出土銀象嵌大刀についても、頭椎大刀である可能性が高い。

ちなみに鍔前面の二重弧文については沢の浦古墳群の報告段階では判明していなかったが、今回2号墳の象嵌表出作業に際して撮影したX線写真に、たまたま象嵌文様の一部が写っていたことから、芋蔓式に沢の浦2号墳の例に結びつけた。鍔の前面に象嵌を施す例は、管見では埼玉県秋平村出土例¹⁵があるのみだが、X線写真に写りにくい部分でもあり、注意すれば今後類例が増えることは充分考えられる。

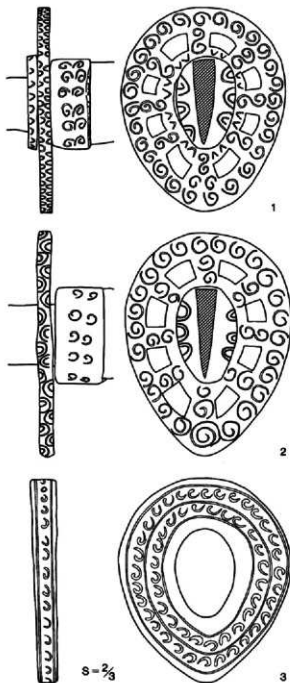
3の庄境1号墳出土の鐔は無窓で、三重圏線の間にC字状文を2列に施す。島根県岡田山1号墳「額田部臣」銘鉄地銀象嵌円頭大刀¹⁶、群馬県伊勢崎市出土鐔¹⁷などに類例の求められるものである。

ではこのような把頭や刀装具を鍔金や金銅製、象嵌などで加飾した大刀（以下裝飾大刀と呼ぶ）をもちえた被葬者の階層や性格についてはどう理解すべきだろうか。町田章氏は6世紀には裝飾大刀が軍事権の象徴として中央の政權から地方の政權に分与され、7世紀になると国家

が地方の末端権力を掌握していく道具に用いたと述べている⁶⁾。新納泉氏は装飾大刀を出土した古墳について、その規模と副葬品の分析から「首長墓型」と「群集墳型」に類型化し、それぞれの被葬者の階層を「地方豪族」と「上層農民」と想定した。さらにこの二つの類型が示す不均等な分布と時間的なズレを捉えて、畿内政権による地域支配の過程としての首長権力の弱体化政策を示すものと説明した⁷⁾。

以上の説にのっとって、兵庫県下における装飾大刀の類例を眺めることにする。表4で示すように装飾大刀の出土例は、今回報告分を含めると都合31古墳・38例を数えることになる。装飾大刀を大陸製の古式環頭、6世紀中葉から末にかけて盛行した単龍・単鳳環頭、6世紀後葉以降に盛行した金銅装大刀、鉄地銀象嵌大刀、銀装大刀、三累環頭大刀に分類して地図上に落としてみたものが挿図66である。その結果、ほとんどが主要な街道筋に面していることが見てとれ、しかも例えば播磨と丹波・但馬を結ぶような地方間レベルの街道筋にはあまり見当たらず、中央へ直結する道筋を抑えた地域に分布する傾向を示している。その分布は大きく4つの地域に分けて考えることができる。

まず摂津から市川流域にかけての山陽道沿いでは、5世紀代～6世紀前葉に副葬された古式の環頭大刀が出土し



挿図65 丹有地区の象嵌刀装具（復原図）

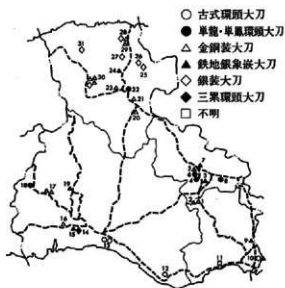
ている。その古墳は前方後円墳であったり、垂飾付耳飾をはじめとする豊富な副葬品をもつなど、地域の首長墓的な性格が認められる。しかし、その後新しい形式の装飾大刀を副葬する段階には続かない。

一方、但馬地域や西播磨地域では、但馬最大古墳群である大敷古墳群や、佐用郡比売神社に隣接する本位田1号墳のような限られた古墳にのみ単龍・単鳳環頭大刀が副葬されている。その反面、金鋼装大刀の出土は多く、この地域における装飾大刀の盛行が遅れたことが窺える。またその分布は街道沿いに線的に延びており、特に傑出した集団は存在しなかったようである。なお但馬では7世紀

中頃になると、主要な街道から外れた小古墳や横穴から出土する銀装大刀が目立つようになり、地域内での分与行為もあったことが窺える。

さて丹后地域における情勢をみると、摂丹境から篠山盆地内にかけての地域に装飾大刀の出土が密集していることが判る。そこは西丹波における最大の平野部であり、東西南北に通ずる交通の要衝でもある。篠山盆地では中期の雲部車塚古墳にみられたような際立った首長墓はすでに姿を消しており、かといって大規模な群集墳を造ることもなく、せいぜい数基から20基程度の古墳群を形成するのみである。ところがそういった小規模な古墳群から単龍・単鳳環頭大刀、金鋼装大刀、鉄地象嵌大刀が出土しており、しかも同一古墳群内から複数出土する例もみられ、継続的な分与を受けていたようである。

このように4つの地域に分けて考察してみると、それぞれの地域の特徴がよく現れてくる。まず摂津から市川流域にかけての山陽道沿いでは、5世紀代から6世紀前半にかけて、首長墓に装飾大刀が副葬され、まさに新納氏の言う「首長墓型」の類型に属することが判る。その他の3つの地域では、6世紀後半から7世紀中頃にかけて小規模な古墳群に副葬される。これは新納氏の「群集墳型」にあてはまり、同一の古墳群内や一つの石室から複数の装飾大刀が出土する例もみられる。また地域内部での分与活動が行われたふしも見受けられる。このような状況は滝瀬芳之氏によると「被葬者の一族は、複数の世代にわたって畿内政権との賜与関係を保ち、(中略)その地方の支配権力を掌握していた(中略)そしてその支配のための手段として中央にならい、さらなる賜与活動を行っていた」¹⁰⁾ことを示すもので、装飾大刀の分与活動に重層



挿図66 兵庫県下出土の装飾大刀

No	古墳名	所在地	大刀形式	No	古墳名	所在地	大刀形式
1	高川1号墳	三田市藍本	金銅装束	17	高畑2号墳	佐用郡三日月町新宿	金銅装束大刀
2	高川2号墳	三田市藍本	銀象嵌大刀	18	本位田1号墳	佐用郡佐用町本位田	単葉薄刃大刀
3	庄境1号墳	多紀郡丹波町大沢新	銀象嵌刀	19	三津5号墳	丹波郡山崎町三津	銀象嵌大刀
4	舟塚古墳	多紀郡丹波町林尾北	単葉薄刃把頭	20	長光古墳	新美郡和田山町龍江	金銅装束大刀
5	山田1号墳	多紀郡丹波町山田下	金銅装束大刀	21	上山5号墳	新美郡和田山町林尾	金銅装束大刀
6	山田2号墳	多紀郡丹波町山田下	単葉薄刃把頭	22	大坂古墳群内	美父郡美父町大坂	単葉薄刃把頭
7	沢の浦2号墳	多紀郡石坂町上飯井	銀象嵌薄刃大刀	23	箕谷2号墳	美父郡八咫町小山	「戊辰年五月」 金銅装束
8	奥谷黒谷古墳	多紀郡藤山町那町	単葉薄刃把頭	24	橋岡古墳	城崎郡日高町橋岡	銀象嵌刀把頭 大刀
9	勝福寺古墳北塚	川西市火打	銀象嵌電文大刀	25	カヤガ谷2号墳穴	出石郡出石町神狹	銀装大刀
10	御園古墳	尼崎市御園	結首双葉薄刃大刀 銀象嵌大刀	26	東山1号墳穴	豊岡市上峰山	銀装大刀
11	——	神戸市東灘区本山町	(銀装大刀)	27	荒神塚古墳	豊岡市大谷	銀装小刀
12	鳳塚(袋塚)古墳	神戸市西区伊川谷町	銀象嵌電文薄刃大刀	28	二見谷1号墳	城崎郡城崎町上山	金銅装束大刀 銀装大刀
13	宮山古墳墳2主体	姫路市西郷町坂元	銀象嵌貼金異型頭環 三葉薄刃大刀 大刀	29	二見谷4号墳	城崎郡城崎町上山	金銅装束大刀 金銅装束薄刃大刀 銀装大刀
14	中井1号墳	竜野市竜野町中井	三葉薄刃大刀	30	文堂古墳	美方郡村岡町寺内	金銅装束薄刃大刀 銀装大刀 金銅装束把頭
15	中井2号墳	竜野市竜野町中井	銀象嵌薄刃大刀	31	伊津古墳	美方郡村岡町原	金銅装束小刀
16	中田内古墳群内	竜野市長吉町中田内	金銅装束大刀				
17	高畑2号墳	佐用郡三日月町新宿	金銅装束電文薄刃大刀				

表4 兵庫県下裝飾大刀出土古墳地名表

構造があることを意味している。

一方、押図66の分布図上で、空白の地域はどのように捉えることができるだろうか。例として、高川古墳群にほど近く、比較的良好に調査されている三田盆地を取り上げることとする。

三田盆地では、中期には目立った古墳が造られなかった反面、後期から終末期には数十基単位の群集墳が営まれており、霧山盆地とは対照的な様相を示す点にまず注目される。さらに横穴式木室、横口式石槨、埴を用いた埋葬施設といった特異な系譜をもつ埋葬形態が忽然と現れ、それをもって古墳の造営を終えている。井守徳男氏はここに異質な集団の存在を見て取り、それを吉士集団に結びつけ、大和政権内での基盤が希薄となり在地官人化した被葬者像を描いている¹⁰⁾。いずれにせよ三田盆地内に中央政権と太いパイプをもった集団が存在したことは間違いないようで、この地域でいち早く須恵器生産が始まったこともそれとは無関係ではないだろう。こうしてみると中期段階までに卓越した地域の首長をもたなかった三田盆地は、中央政権による直接支配が速かであったことが考えられる。従って、そのような地域に対し、裝飾大刀が分与されることはなかったであろう。

以上、高川古墳群出土の裝飾大刀から敷衍して、兵庫県下出土の裝飾大刀を概観し、裝飾大刀のもつ意義と被葬者の性格について言及してきた。その結果、大筋では新納氏の論考をなぞり、追認した形となった。また裝飾大刀が出土していない地域についても、今回は特に三田盆地を取り上げて若干触れたが、よく似た状況は小野市を中心とした加古川中流域にも認められ

る見通しをもっており、別の機会に検証してみたいと思う。今後、各地域ごとに古墳の埋葬形態、各種金銅製品の搬入形態を比較することにより、中央政権による地域支配への過程が一層明らかにされるであろう。

註 (1) 文献7による。なお報告書の中で鞘尻金具とされていたものを西山要一氏は小刀用の円頭柄頭とされている(文献24)が、本書では報告書に従って鞘尻金具として扱う。

(2) 沢の浦2号墳の跡は、刀身と遊離して出土したために装着の向きは不明で、復原図はあくまで仮定のものである。

(3) 埼玉県『埼玉県史』第1巻 1951年

(4) 鳥取県教育委員会『出雲岡田山古墳』1987年

(5) 文献24による。

(6) 文献13による。

(7) 新納泉『装束付大刀と古墳時代後期の兵制』『考古学研究』30-3 1983年

(8) 文献16による。

(9) 井守徳男『畿内周縁部における古墳の展開と終末—兵庫三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として—』『北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆』日本史論叢文 1986年

装束大刀地名参考文献 (Noは地名表に対応)

3. 兵庫県教育委員会『庄境1号墳』1987年

4. 多紀郡教育事務組合教育委員会『西山北古墳調査報告書』1972年

5. 6. 多紀郡教育事務組合教育委員会『山田群集墳』『飯尾群集墳分布調査報告書』1973年

7. 兵庫県教育委員会『沢の浦古墳群』1987年

8. 穴沢時光、馬目順一『日本における龍鳳彫頭大刀の製作と配布—一つの試論—』『月刊考古学ジャーナル』266号 ニュー・サイエンス社 1986年

9. 梅原栄治『摂津火打村勝勝寺古墳』『日本古文化研究所報告』1 1935年

10. 町田 章『環頭大刀二三事』『山本清先生喜寿記念論集 山崎考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 1986年。なお銀象嵌大刀については、尾崎市教育委員会 福井英治氏のご好意により、未発表資料を掲載させていただいた。

11. 斉藤 忠『日本古墳文化資料総覧』吉川弘文館1966年

12. 町田 章 1986年(前掲)

13. 町田 章『環頭の系譜』『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所 1976年

14. 15. 兵庫県教育委員会『中井古墳群』1987年

16. 滝瀬芳之『円頭・圭頭・方頭大刀について』『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 1984年

17. 18. 三日月町史編集委員会『三日月町史』第1巻古代 1964年

19. 山崎町教育委員会『三津群集墳』1987年。山崎町教育委員会 亀井義彦氏のご好意により、X線写真を発見させていただいた。

20. 榎本誠一『兵庫県和田山町筒箭江出土の環頭大刀』『古代学研究』67 古代学研究会 1973年

21. 和田山町教育委員会『秋葉山墳墓群』1978年

22. 養父町史編集委員会『養父町史』第1巻 1990年

23. 八咫町教育委員会『箕谷古墳群』1987年

24. 西山要一『古墳時代の象嵌一刀装具について』『考古学雑誌』72-1 1986年

25. 平成3年3月に兵庫県教育委員会の発掘調査で出土した。

26. 豊岡市教育委員会『上鉢山・東山墳墓群』1989年

27. 兵庫県立円山川公苑美術館『きらびやかな黄金の国 但馬の埋蔵文化財展図録』1988年

28. 29. 城崎町教育委員会『二見谷古墳群』1975年

30. 村岡町誌編纂委員会『村岡町誌』上 1980年

31. 兵庫県立円山川公苑美術館 1988年(前掲)

【追記】脱稿後、水上町教育委員会、園井和歌氏より、水上郡春日町藤原塚古墳から金銅装大刀が出土していることを御教示頂き、発見したのが刀装具がほとんど失われているため、大刀形式は不明であった(水上郡教育委員会『水上郡の文化財』1989)。

第5節 中・近世墓

中世墓1～4とした遺構の他に1・2号墳の再利用、集石遺構の検討を通じて中・近世墓及び中・近世土器についてまとめる。

中世墓2・3は楕円形土壌内に箱形に石を組んで櫃とし、火葬骨を納めている。上部は石で蓋をしている。中世墓4は中世墓2・3の倍の規模で石組みを持たず、火葬骨を納めている。上部は石でしっかり蓋がされている。また、中世墓1は土壌の形状が皿状としか判らないが、鉄釘が1点出土していることから木箱を蔵骨器としていたとも考えられる。副葬品は中世墓1は銭1点、中世墓2は土師器皿1点・銭1点、中世墓4は土師器皿3点・小皿1点がある。中世墓2・4の土師器皿は口径10.1～10.5cm、器高2.3～2.6cmとほぼ同法量で、小皿は口径6.8cm、器高1.9cmのへそ皿であり、14世紀末から15世紀前半の土器と考える。付近で表採された、蔵骨器としても使用される丹波焼壺96からも同じ時期が与えられ、中世墓の成立は室町時代前期と判る(挿図61)。

1・2号墳から瀬戸・美濃焼灰釉皿が1点と3点出土しており(86～89)、口径10.0～10.2cm、器高2.0～3.0cm、底径5.5～5.8cmと法量が少し分かれる。また、高台の高さが1～4mmと幅をもつ。焼成時の重ね焼きの粘土(輪トチン)に太細がある。以上の点から窯の違いと時間幅が想定され、室町時代末(16世紀半ば頃)が考えられる。また、87は見込み部の軸が使用時にかきとられたものか径5.0cm程磨かれており、特別な使用が考えられる。

近世丹波焼匣鉢99は中世墓2の調査時に出土していたが、周辺部の調査時に同一個体が他の100～102の匣鉢と骨と一緒に見つかった。近くの古老の話等から近世墓地の場所でもあったようで匣鉢は蔵骨器として使用していたと考えられる。匣鉢は底部の造りで2種類(提灯形・筒形)、口縁部の造りで2種類(有段・直)計3種類に分かれる。1. 提灯形有段99 2. 提灯形直口100 3. 筒形直口101・102で101は粘土紐による加飾が見られ、窯道具が他の用途として展開した形となっている。匣鉢の基本形は101の口径11.0cm、器高11.5cm、底形11.5cmといった1:1:1の寸法の規格性を持っている。

1号墳の丹波焼摺鉢56は口径37.4cm、器高15.9cm、底径15.5cmで2.5:1:1といった摺鉢の一般的な規格性を持ち、かつ口径が1尺2寸と大きく壙棺の蓋として作られる物である。また、用痕もみとめられず完形で残っていたことなどから、本来は墓に用いられていた物であろう。丹波系摺鉢の研究から18世紀前半に位置する。柩目は幅2cm、7本1単位で見込み部の中心に十字形に描き、次に体部に放射状に38単位に描き、更に底に円形を描く。口縁は立ち上がり、外に2段の凹線ナデを施す。

第6節 高川古墳群について

高川古墳群は3基の円墳から構成され、うち1・2号墳について発掘調査を行った。2基の古墳は調査前からほぼ全壊状態であったが、思いのほか豊富な副葬品が出土した。中でも1号墳の金銅製鐙と2号墳の鉄地銀象嵌大刀・金剛装馬具の出土は特筆に値し、注目すべき調査となった。

1・2号墳は規模・外形・内部主体または副葬品においても、互いに遜色のないものである。ただ後世に横穴式石室の再利用および土取りなどを被ったことにより、遺物の遺存状況に大きな差異が認められた。すなわち1号墳は須恵器が多かった割に鉄器があまり残っておらず、2号墳は全くその逆の状況であった。須恵器の年代から、1号墳は6世紀半ばから埋葬が始まり、7世紀初頭までの追葬を認めることができた。2号墳は須恵器が僅少であったために6世紀後半の年代が与えられるに止まったが、1号墳の時期幅からはみ出るような遺物はみられない。

高川古墳群は長丹境日出坂峠から虚空蔵山の麓を占有する小規模な古墳群である。この地から装飾大刀が出土したことは、大和・中央政権による地域支配の一端を示すもので、何らかの機会中央と結びつき、権威の具現化の象徴物として輝く装飾大刀を戴く被葬者像が浮かび上がる。このような装飾大刀のもつ意義は、それを持たない近隣の地域と対照させることで、さらに議論を深められるものと考えられる。

須恵器の供給体制については、複数の産地からの製品が認められており、今後、窯跡出土須恵器の胎土分析等基礎資料の集積をもとに検討したい。他の古墳群においても小地域内の異なる窯跡出土の須恵器の供給について考慮を必要とする。なお、須恵器生産地においては積極的に胎土分析他基礎資料の集積に努め、新たな研究への糸口を示すことも必要であろう。

中空耳環は遺存状態が悪かったため製作技法の分析が可能となった。付載として村上 隆氏の貴重な分析結果があり、参照されたい。

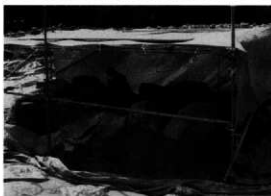
以上、高川古墳群の調査で近畿自動車道舞鶴線関係の古墳の調査は終了した。数多くの古墳(多紀郡西紀町沢ノ浦古墳群・上板井古墳・箱塚古墳群・内場山墳墓/古墳)及び遺跡(多紀郡西紀町板井寺ヶ谷遺跡・西木ノ部遺跡・内場山城跡、三田市木戸窯跡)の調査に取り組んで、多くの成果を報告書に生み出し、かつ志半ばで中座しなければならなかった我々の同僚の市橋重喜君のご冥福をここにお祈り致します。高川古墳群調査にかけた市橋君の情熱の一端でも本書において我々が描けていたら幸いです。

付載は公開していません

圖 版



1. 虚空蔵山を望む(東から)



2. 作業風景



1. 調査前全景 (西から)



2. 調査後全景 (西から)



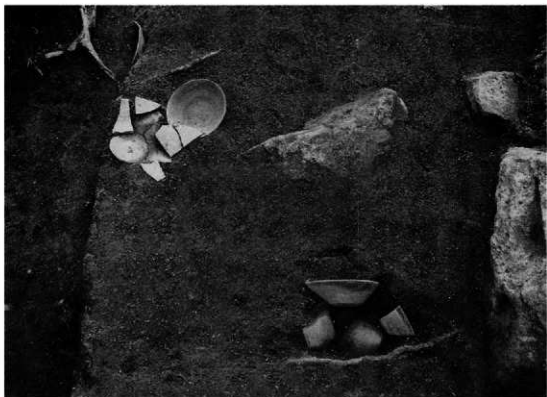
1. 調査前 (南から)



2. 石室全景 (西から)



1. 近世丹波焼播鉢出土状況



2. 古代・中世須恵器出土状況



1. 炭層検出状況(南から)



2. 石室第2次床面(南から)



1. 奥壁付近副葬品出土状況(北から)



2. 鉄罐出土状況



1. 石室全景（真上から）



2. 石室全景（南から）



3. 奥壁付近副葬品出土状況（南から）



1. 石室 (正面から)



2. 石室掘り方完掘状況 (南から)



1. 調査前 (南から)



2. 表土除去状況 (南から)



1. 炭層・中世遺物出土状況(西から)



2. 古墳時代・古代遺物出土状況(南から)



1. 石室第2次床面 (南から)



2. 石室側面 (東から)



1. 奈良時代須恵器長頸壺出土状況



2. 奈良時代須恵器長頸壺(藏骨器)出土状況



1. 石室全景 (真上から)



2. 石室全景 (南から)



3. 奥壁付近副葬品出土状況 (南から)



1. 副葬品出土状況（西から）



2. 鉄地金銅張飾金具出土状況（西から）



1. 石室 (正面から)



2. 石室掘り方完掘状況 (南から)



1. 築石遺構(東から)



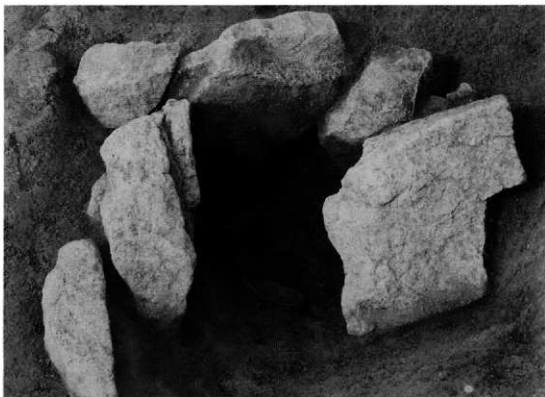
2. 同石材除去後(東から)



3. 中世墓1(南から)



1. 中世墓2 上面遺物出土状況(東から)



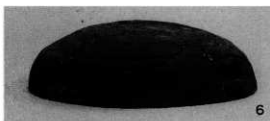
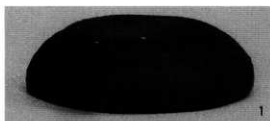
2. 中世墓2 土師器小皿出土状況(東から)

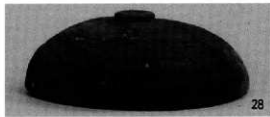
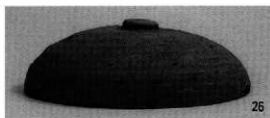


1. 中世墓3 (北から)



2. 中世墓4 (東から)





須惠器 有蓋高杯





須恵器 高杯・提瓶



42



49



43



52



54



44



45



55



46

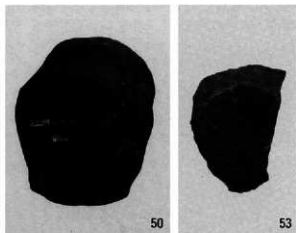


47

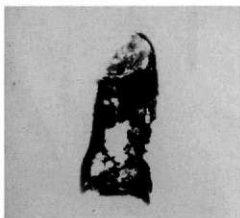
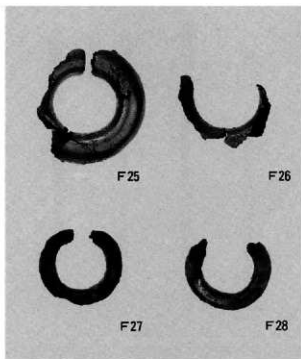
須恵器 杯・碗・小皿、土師器 杯・小皿、丹波焼 摺鉢



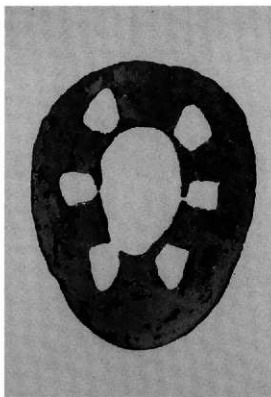
1. 須恵器 甕、丹波焼 鉢



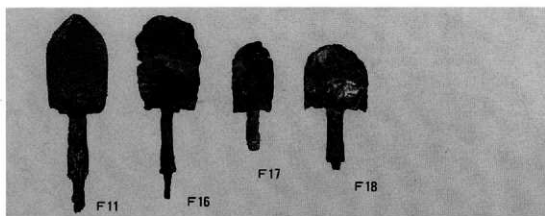
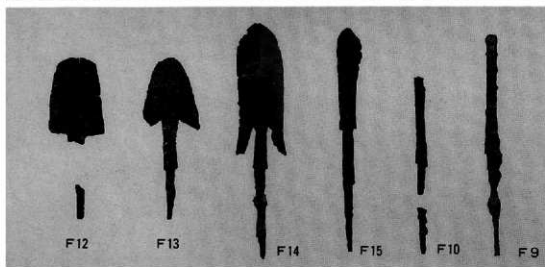
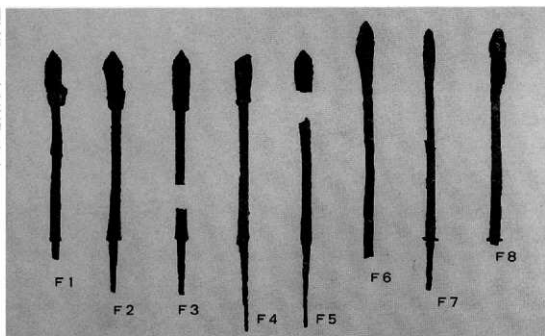
2. 須恵器 椀、黒色土器 椀、銭、砥石

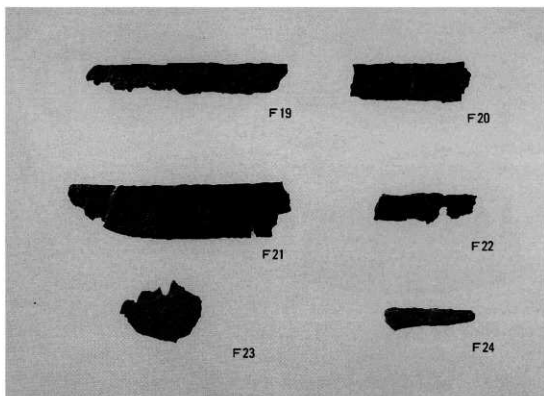


1. 耳環

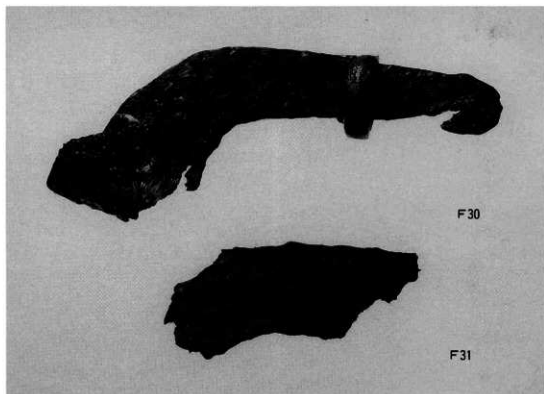


2. 金銅製鐺

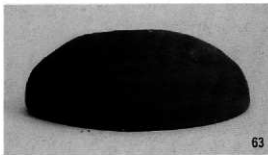
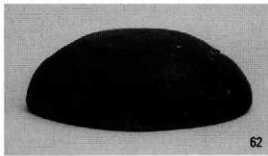
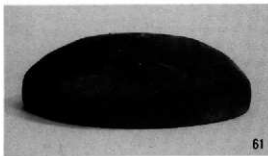
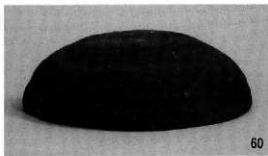
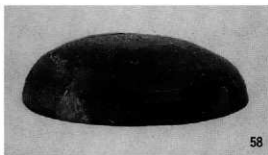


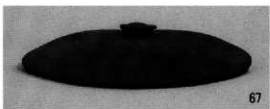


1. 刀 刀子

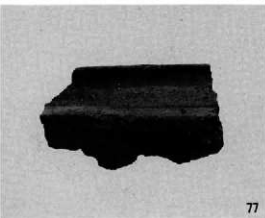


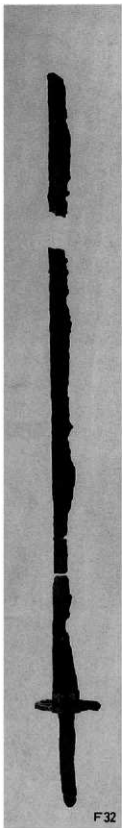
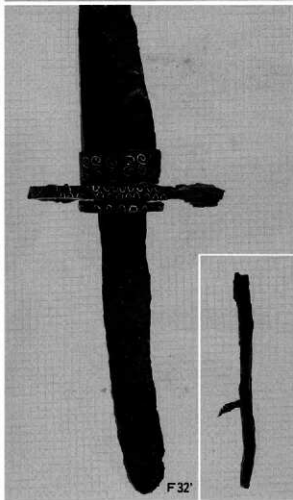
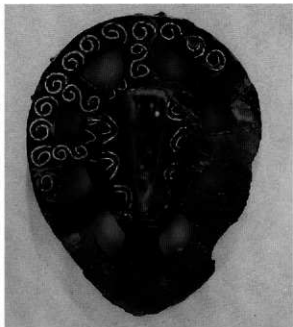
2. 鎌



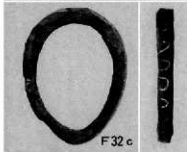
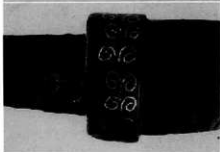
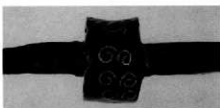
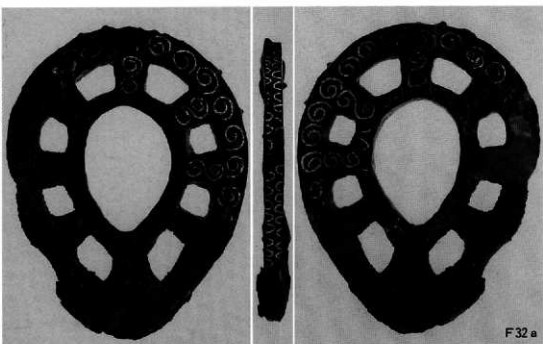


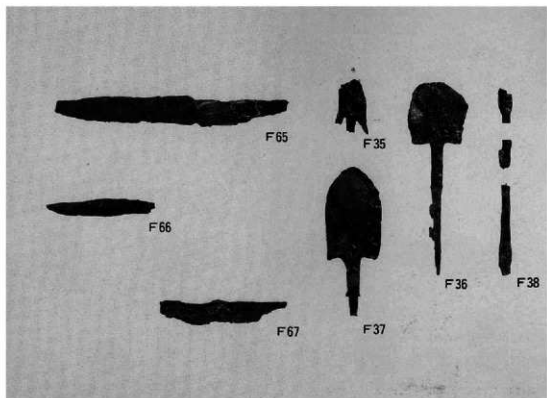
須恵器 杯蓋・杯身・長頸壺



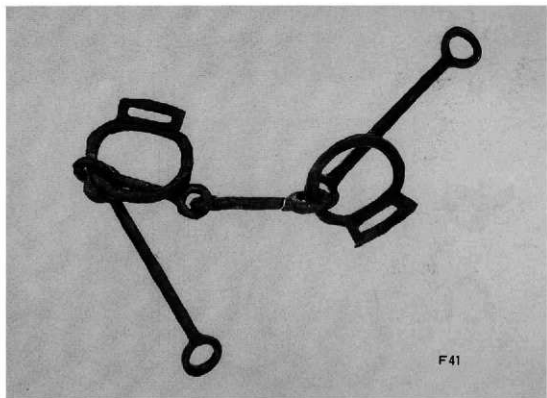


銀象嵌大刀

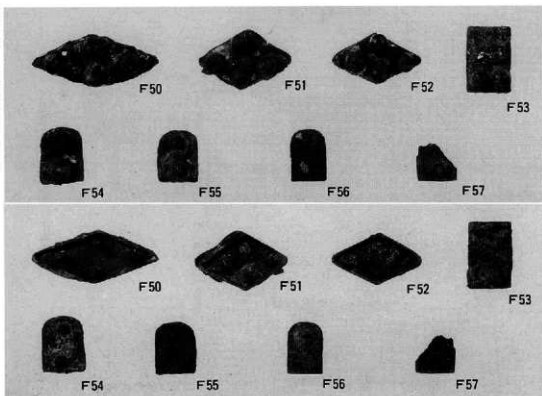




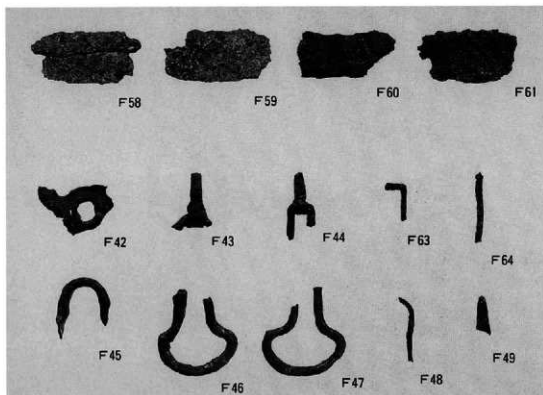
1. 刀子・鉄鎌



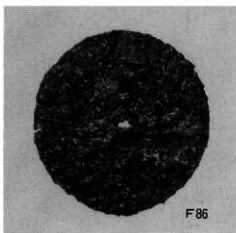
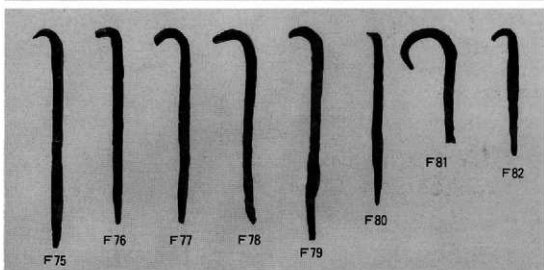
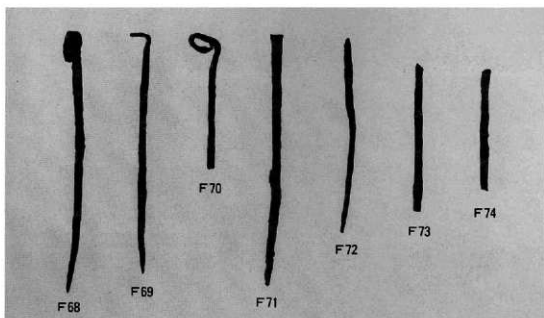
2. 轡



1. 鉄地金銅張飾金具

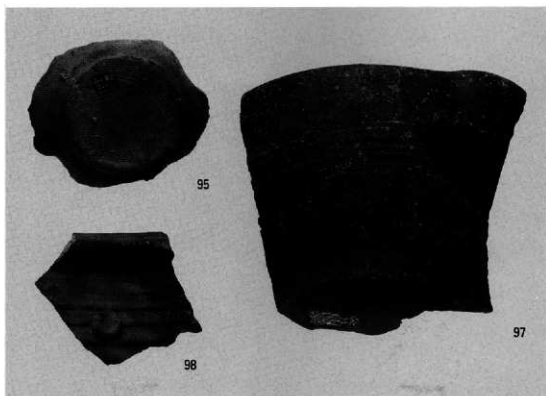


2. 鞆金具ほか

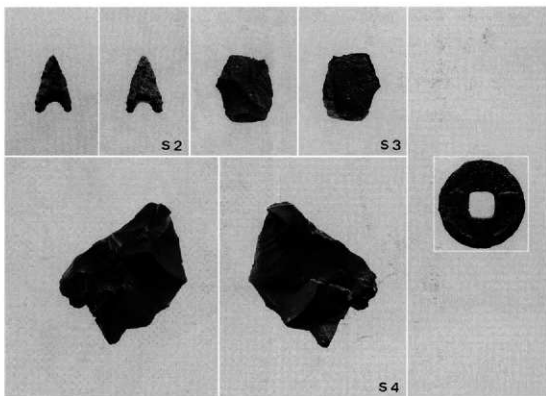


釘・紡錘車

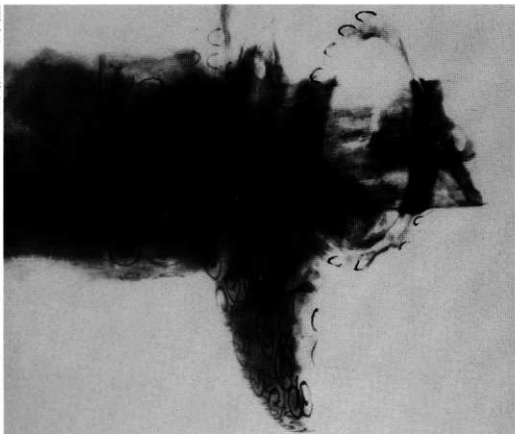




1. 須恵器 椀、丹波焼 播鉢・壺



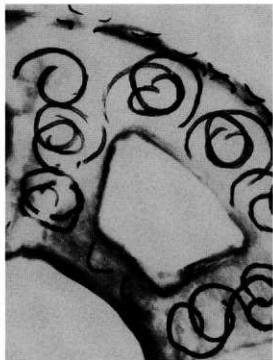
2. 石器、銭



1. 銀象嵌刀装具 処理前（横から）



2. 銀象嵌刀装具 処理前（斜めから）



3. 銀象嵌拡大写真

兵庫県文化財調査報告書 第97冊

高川古墳群

近畿自動車道神姫線開通係埋蔵文化財調査報告書(xv)

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月30日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番地5号

T E L (078) 631-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手5丁目10番1号

T E L (078) 341-7711

印刷 船場印刷株式会社

〒670 姫路市定元町4-2

T E L (0792) 96-3535
